転生したけど、海賊でも海軍でもなく賞金稼ぎになります

ミカヅキ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルフィの双子の妹に転生。やっぱい、生まれた時から死亡フラグ？

海賊？海軍？どっちもやだ…。自由に生きて行くために、おじいちゃん、私賞金稼ぎになるね！

もう1つの連載もあるのに、懲りずに2作目を上げました。更新ペースは非常にゆっくりになりますが、気長にお待ちください。

目次

プロローグ ―――― 1
主人公設定 ―――― 6
第1話　ルフィはいつの間にか原作に突入していたようです。 ―――― 9
第2話　たまには師弟で語らいましょう ―――― 18
第3話　〝義兄〟も心配してくれているようです ―――― 27
第4話　バタフライ・エフェクトの恐ろしさを知りました ―――― 34
第5話　それは1つの始まりでした ―――― 46
第6話　運命のレールがズレたようです ―――― 55
第7話　実はこれが初対面でした ―――― 63
第8話　ちょっとの休息も必要です ―――― 72
第9話　怒りで眩暈を覚えました ―――― 80
第10話　それぞれの怒り ―――― 90
第11話　〝姫夜叉〟 ―――― 101

プロローグ

ガンッ！

思いっきり頭を打ち付け、痛みと衝撃で一瞬意識が飛ぶ。

「っ・・・・・・・・!!!」

あまりの痛みにうずくまって悶絶していると、

「ターニャ、だいじょうぶか!?」

兄の焦った声が聞こえてくる。さっきまで1人で怒って人を置いて行こうとした癖に、根が単純で素直なので心配になったらしい。

取りあえず、気持ちは嬉しいが兄よ・・・・。したたかに打ち付けた患部を思いっきり押すのは止めてほしい。

「うぎっ！」

痛みのあまり目から星が飛び、一瞬息が詰まった。

「お、おれマキノ呼んでくる！」

止める間も無く走って言ってしまった兄を見送り、誰もいなくなった部屋の中で1人で呟く。

「おもいだじだ・・・・。」
　声を出すと涙声で酷くつぶれたようになったが、自分としてはそれどころでは無かった。
「ターニャ?!大丈夫?」
　兄に状況を聞いたのだろう。駆け寄ってきた女性―マキノが声も無くボロボロ泣いているターニャに尋ねた。
「あだまうっだ・・・・・。」
　相変わらず涙声だが、どうやらそれで何となくの事態を悟ってくれたらしい。
「氷持ってきてあげるわ。ちょっと待ってて。」
　そう言って自分の店に入っていく女性―マキノを見送り、ひたすらオロオロしているだけの双子の兄―モンキー・D・ルフィに目をやった。
「いてぇのか?だいじょうぶか?」
　自分がボロボロ泣いているからだろう、ルフィもちょっと泣きそうになっている。
「いだいげど、だいじょうぶ・・・。」
　そう、今の自分には痛みよりもよっぽど重要なことで頭が一杯だったので。
　それからマキノが持ってきてくれた氷のうで頭を冷やしつつ（でっかいコブができていた）、状況を整理する。

因みにルフィは、泣き止んだ自分に安心したのか、マキノに諭された為か現在は1人で遊びに出かけている。マキノも忙しいらしく、後で様子を見に来るからそれまでゆっくり休んでいるように、と言い置いて再び店に行ってしまった。

状況整理にはもってこいの状況である。

さて、自分の名前はモンキー・D・ターニャ。現在5歳と3ヵ月。

そこまで考えて確信する。ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に転生してしまったのだ、と。

そして思う。どうせなら主人公(ルフィ)の兄妹としてではなく、幼馴染くらいのポジションだったら平穏な人生を歩めたのに・・・・、と。

さて、痛みが徐々に引いてくると頭の中もすっきりとして前世の自分のこともはっきりと思い出してきた。

前世では大学3年の就活生だった。特に美人と言える程でもないがブスと言われる程でもなく、すぐに集団に埋没してしまうタイプで、小学生の頃から名前と顔を覚えられるのは最後の方、というある意味損な役回りではあった。

まあ、同じようなタイプは他にもいた為、特に浮くようなことも無く、似たようなタイプでグループを作り、学生時代を過ごしてきたような人間である。

昔からアニメや漫画が大好きで、特にそれを隠すことも無くオープンにしてきた。おかげで、似たような趣味の友人にも恵まれた為、そこそこ充実した人生だったと言える。

まあ、最期は就活途中に玉突き事故に巻き込まれて死んだので、そういう意味では不幸だったのかもしれないが・・・・。そこそこ大きな事故だったし、他にも恐らく死者はいたと思うので、自分だけが不幸という訳でも無いだろう。

そこまで考えて、もしかして他にも転生者がいるかもしれない、とちらっと考えたがすぐに確かめる術(すべ)もないし、もしそれっぽい人を見かけたら声をかけよう、と決めてそこでそれについて考えるのは止めにした。

これからどうするか、について考えたいと思う。

ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥは特に好きな漫画の１つであり、単行本は全て集め、毎週ジャンプも欠かさず読んでいた。尤(もっと)も、ドレスローザ編の決着がついた辺りのところで事故に遭った為、それ以降に何があったのかは知らないが。

まず、ルフィの実の妹、という立場になってしまった以上、平穏な人生という選択肢は消えている。祖父がガープなのはまだしも、実の父親が革命家ドラゴンという時点で、海軍に目をつけられることは必至。

もし何もしないまま頂上戦争を迎えた場合、①悪の血を引く不穏分子として海軍（可能性としてはサカズキ）に殺される、②ルフィもしくは父(ドラゴン)、あるいは祖父(ガープ)に恨みを持つ人間に殺されるｏｒ利用されるというようなことが、最悪の事態として予想される。

少なくとも自分の身を守れる程度の実力は必要だった。もしかして実力をつけ過ぎ

てルート①が高くなるかもしれないが、まだ鍛え始めてもいないうちからそんなことを心配しても仕方が無い。やった後悔より、やらなかった後悔の方が強いと言うし。

差し当たって、祖父からの海軍勧誘、ルフィからの海賊勧誘フラグを折りつつ、実力をつけていかなくてはいけない。

取りあえず、修行は祖父につけてもらいながら、いかにして海軍フラグを折っていくかが重要である。

主人公設定

ー主人公ー

名前：モンキー・D・ターニャ

年齢：ルフィと同じ

容姿：サラダルフィをセミロングにした感じ。トリップでは無く、転生で正真正銘ワンピース世界の生まれである為、ナミやロビンには劣るものの、ターニャもそこそこスタイルが良い。

性格：先を見越す能力に長け、処世術に長けた世渡り上手。どちらかと言えばドライだが、何だかんだ面倒見がいい。

家族：ガープ、ルフィ

※父親（ドラゴン）と一緒に過ごした記憶は全く無い為、ノーカン。

来歴：ルフィの双子の妹として誕生。ルフィの勧誘と祖父の強烈なプッシュを振り切り、現在は賞金稼ぎとして〝新世界〟で活動中。

師匠：ガープ、ボガード、〝鷹の目〟ミホーク

※ルフィとは異なり、祖父に頼み込んでマリンフォードで祖父に鍛えてもらう。体術

よりは剣術の才能があった為、最初はボガードに師事するが、ターニャの才能を見抜いたミホークが興味本位で修行をつけるうちに師弟関係に。

武器：初代〝鬼徹〟、ミホークからもらったペンダント型仕込みナイフ

※最初はもっと安い量産された刀を使っていたが、旅立ちの直後にとある海賊団を壊滅させた際に船の宝物庫で発見。自らの覇気で抵抗を捩じ伏せ、自身を主人と認めさせた。

服装：どことなくミホークの服装に似ている。黒い開襟シャツに黒いパンツ、黒いブーツ。腰に飾りベルトを2重に巻いて帯刀。黒い指無しのグローブを着けている。

アクセサリーとしてミホークからもらったペンダント型仕込みナイフと、銀色のバレッタを身に付ける。

実力：〝新世界〟を1人で渡って行ける程度には強い。剣の腕はミホークに認められている程。体術もそこそこで、〝六式〟も基礎ならば使える（ただし、途中で剣術に完全にシフトした為、応用はそれ程利かない）。

覇気：覇王色の覇気使いで、武装色より見聞色の方が得意

※覇王色は血筋的なものが大きい。日々成長中だが、まだ年若い事もあり、同じ覇王色使いでも歴戦の海賊たちには劣る。現段階では覇気を操る事は大きなアドバンテージだが、2年後にはうかうかしているとルフィに抜かされそうな位置。

航海術についてもミホークに叩き込まれ、1人で海を渡っている。ミホークの〝棺船〟と大して変わらない大きさの木造船（ヨット）で新世界の海を自在に渡っており、航海士としても一流。

┃主人公の相棒┃

名前：ドゥーイ

偉大なる航路（グランドライン）―アリア島で出逢った小虎（ことら）。デカい猫位のサイズしかないが、ミニマム・タイガーという種類の虎（とら）である為、大人になってもこのサイズ。ドゥーイは人間で換算（かんさん）すると15～16歳位の為、既（すで）にサイズ的にはほぼＭａｘ。

体は小さいが、アリア島は猛獣が多く過酷な環境である為、ミニマム・タイガーは長い年月を経て覇気を使えるように進化した種（しゅ）。覇気が使える為か、虎（とら）としては長生きの種（しゅ）で、平均で50年近く生きる。

能力：〝超人系（パラミシア）〟ラジラジの実を食べた、〝大きさ自在〟虎（とら）。

※小さくなる事は出来ないが、自身の100倍までの大きさなら自在に巨大化出来る。陸地では、良く7～8倍位の大きさになってターニャを乗せて走る。

※モデルは某夢の国の海の方の中東（ちゅうとう）エリアにいるオリジナルキャラクター。

第1話　ルフィはいつの間にか原作に突入していたようです。

ー新世界、とある島ー

「よっ、と……！」

ザパァッン……！

浅瀬に乗り上げた後で一旦船を下り、バシャバシャと波をかき分けながら自身の船を浜辺にゴロゴロと転がっている岩の1つに縄で括り付ける。

「ガルゥ？」

「良し！もう良いよ、ドゥーイ。下りておいで。」

「ガゥー！」

船の中からこちらを伺っていた相棒の小虎、ドゥーイに合図を出せば、嬉しそうに船から跳躍して来る。

「ふぁ…。やっと着いたね――――。前の島出てから3日か……。」

「ガルゥ…。」

3日間、ほぼ不眠不休で船を操っていた主人を、ドゥーイが心配そうに見上げた。

「だいじょぶ、だいじょぶ。ちょっと眠いだけ…。あうふ……。」
ドゥーイを安心させるように片膝を付き、その艶やかな毛並みを撫でてやりながらも、欠伸が止まらない。
クー、クー
「ん？」
不意に上空から響いた鳴き声に目を向けてみれば、ニュース・クーが何羽か固まって飛び、島に新聞を運んでいるところだった。
すっ、と手を上げると彼らも心得たもので、すぐに旋回しながら下降してくる。
「1部ちょうだい。」
ベリーと引き換えに新聞を受け取る。
「ありがと。」
クー！
一鳴きして飛び立っていくニュース・クーを見送り、新聞を開く。
バササ・・・。
「ヤバッ。」
新聞に織り込んであったチラシやら何やらが落ちたのを慌てて拾う。
「ん？」

その中に混ざっていた1枚の手配書にふと目が奪われた。
「へぇ〜。ついに来たんだ、ルフィ。」
手に取った手配書には、麦わら帽子を被った満面の笑みの少年が写っている。懸賞金は3千万ベリー。
どうやら、いつの間にか兄は旅立ち、海賊となっていたらしい。
「ガルゥ……?」
ドゥーイが足元から不思議そうな顔で見上げてくる。
「ああ。ドゥーイは知らなかったんだっけ?ほら。あたしのお兄ちゃん。ルフィっていうんだよ。」
膝を付いて屈(かが)んでやり、ドゥーイに手配書を見せてやる。
「ガウッ!」
「割と似てるでしょ?双子だから年は変わらないんだけどね。」
(元気そうで何より…。)
驚いたように小さく吠(ほ)えるドゥーイに笑いながら、久しぶりに目にした兄の笑顔に安心しつつ、モンキー・D・ターニャはその手配書を丁寧に畳(たた)んでしまい込んだ。
「さて、まずは腹ごしらえっと♪この島は何がおいしいかな?ドゥーイ?」
「ガウガウッ♪」

機嫌良く食事の出来る場所を探し始めた主人に、ドゥーイもまた跳ねるような足取りでついていく。

その時だった。

「！」

「ガルゥッ!!」

ターニャとドゥーイがその場を飛び退いた直後、

ドオンッ!!!!

凄まじい突風が、直前まで彼女たちがいた場所を通り過ぎる。

バキバキバキ……!!!

ドオンッ……!!

その突風により浜辺の防風林の一部が薙ぎ倒され、更地となった。

「…港じゃなくて島の反対側に上陸しておいて良かった。ったく、毎回毎回挨拶代わりに斬撃ぶっ放すの止めてもらえませんか？先生。」

「グルルルルゥ……!!」

主人を守るように前に出、威嚇するドゥーイを宥めながら、ターニャが沖合に目を向ける。

「ふむ。鈍ってはいないようだ。久しいな、ターニャ。」

「お久しぶりです。ミホーク先生。」
彼愛用の小型ボート〝棺船〟に乗った世界一の大剣豪、通称を〝鷹の目〟。ジュラキュール・ミホークがそこにいた。
「2年ぶりですね。っと、ダメだよドゥーイ！この人はあたしの先生！敵じゃないって!!」
「ガルルァッ!!」
今にもミホークに飛びかかりそうなドゥーイをターニャが抱き上げる。
「猫、ではないな。虎の子か？」
〝棺船〟から降り立ち、岸に付けながらミホークがドゥーイに目を向けた。
「これでも個体としてはもう大人だそうですよ。ミニマム・タイガーって種類なんだそうです。」
ガルガルとターニャの腕の中で威嚇してくるドゥーイだったが、主人と外敵が親し気に話をするのを見て徐々に落ち着いてきたようだった。
「グルル……。」
まだミホークを胡散臭気に見ながらも、最後に低く唸った後は静かになったドゥーイに、不思議そうなミホークが（付き合いの長いターニャだからこそ分かる程度の変化しか無かったが）ターニャに尋ねる。

「それはそうと、何故この虎はおれを威嚇して来るのだ？」
「……先生が、最初に何の挨拶も無くいきなり斬撃ぶっ放してきたからだと思いますけど。」
（やっぱり、この人ちょっと天然入ってる…。）
　何とも言えない表情のターニャが返答しつつ、以前から思っていた事を内心で再確認する。
「そうか。」
　一方のミホークは弟子の微妙な表情を全く気にする事無く、納得した様子を見せた。
「ところで先生、何でこの島に？この海域に強い剣士でもいたんですか？」
　抱き上げたままだったドゥーイを足元に下ろしながら、ターニャがミホークに問う。
　基本的に自由気儘に海を流離っている人だが、この海域周辺の島は至って平穏であり、ミホークの興味を惹くようなものは何も無かった筈だ。
「ここから少し離れた場所に、〝赤髪〟が縄張りの１つにしている無人島がある。」
「！シャンクスが？」
　その名を聞いたのも、随分と久しぶりである。ルフィ以外の口からその名を聞くのは、およそ１０年ぶりだろうか。祖父は、ルフィに悪影響を与えた、としてシャンクスを毛嫌いしていたから、周りの者たちでそれを口にしようとする者はいなかった。

しかし、それを口にしたのが他ならぬ〝鷹の目〟ミホークであるならばそれも納得だ。〝鷹の目〟と〝赤髪〟の決闘については有名であるし、シャンクス自身も一度ミホークの事を話していたのを昔聞いた事があった。

「そうか、そう言えばお前はあの小僧とは兄妹だったな。」

「あの小僧ってまさか……！」

思い出したように呟くミホークの言葉に、ターニャが微かに目を瞠る。

「〝モンキー・D・ルフィ〟。あの〝赤髪〟から例の〝麦わら帽子〟を託された男だろう。」

ミホークが懐から出して見せたのは、先程ターニャ自身も手に入れた、実兄・ルフィの手配書だった。

そこで思い出す。〝原作〟では、〝鷹の目〟ミホークが東の海でルフィと接触し、その後で〝赤髪〟のシャンクスと酒盛りしていた事に。

「…まさか、それをシャンクスに見せる為にわざわざ？」

「……近くまで来たからな。そのついでだ。」

（絶対嘘だ……。）

分かりやすく顔をフイッと背けて見せたミホークに、ターニャが内心で突っ込む。

そして確信する。以前から思っていたが、やっぱりこの人クーデレだ、と。

「お前も行くか？」
何か言いたげな弟子の視線を振り切るように、ミホークが話題を変えた。
「行くってどこに？」
「無論、〝赤髪〟の所へだ。お前も懐かしかろう。」
その言葉にターニャの心が揺れる。
行きたい、久しぶりにシャンクスたちにも会いたいが……。
「久々にシャンクスたちに会いたいのは山々なんですけど、今のあたしは賞金稼ぎですから……。」
そう。〝四皇〟の配下に手を出した事こそ無いが、今の自分は海賊を捕えて海軍に引き渡し、金を得ている。
もう何も知らない子どもでは無いのだ。
同業となったルフィならともかく、海軍程では無いにしろ敵対する関係となった自分に会っても困らせるだけだろう。
「……その程度、気にするような男でもあるまい。」
「シャンクスや副船長たちはそうでしょうけど、今の〝赤髪海賊団〟は大所帯ですから。あたしの事を知らない船員も多いでしょうし……。中にはあたしを恨んでいる人もいるかもしれませんしね。止めときます。」

賞金稼ぎとして旅立っておよそ2年。ターニャが壊滅させた海賊団は１００近い。中には逃げ延びた後、新たな海賊団に入った者もいると聞く。新世界の海賊は、ルーキーを除きいずれかの〝四皇〟の配下になった者がほとんどであるから、ターニャに恨みを持つ者がいないとも限らない。

シャンクス程の海賊がターニャ1人と関わりを持っていたところで揺らぐとも思えないが、余計な摩擦は無いに越した事は無いだろう。

「……そうか。」

ターニャの意志が固いのを見て取り、ミホークもそれ以上は何も言わなかった。

「先生、今日はこの島に泊まるんでしょう?·良かったら食事をご一緒しませんか?」

「…そうだな。久々にそれも良かろう。」

代わりに、とばかりに出されたターニャの提案にミホークも頷く。

2人と1匹は肩を並べ、町へと向かった。

第２話　たまには師弟で語らいましょう

ー12年前、海軍本部ー

「116、117、118……！」

海軍本部の鍛錬場に、その場に似つかわしくない幼い少女、否幼女の姿があった。

精々４～５歳位だろう幼女が、たった１人で一心不乱に木刀を振る姿はどこかシュールである。

しかし、と計らずもそれに遭遇する事となった〝鷹の目〟ミホークはその太刀筋に思わず興味を惹かれた。

まだまだ拙いものの、才能を感じさせる。むしろ、年齢を考えれば驚異的と言えるだろう。惜しむらくは、振っている木刀そのもののサイズが幼女に合っていない事で、どうしても剣先がブレてしまう事だろう。あのまま振り続けていれば妙な癖が付いてしまうかもしれない。

それは惜しい。

そう考えたミホークの行動は早かった。

「待て。」

「え?!」
足早に幼女に近付き、その木刀を掴んで素振りを制止する。
一方、急に現れた男に幼女が驚いている。目を大きく見開き、固まっていた。
しかし、それに全く構う事無く自身の思う通りに行動するのが、〝鷹の目〟ミホークという男である。幼女から完全に木刀を取り上げてしまうと、それを検分し始めた。
「ふむ…。腕を伸ばせ。」
「へ?」
いきなり現れて木刀を取り上げたかと思うと、急に意味の分からない事を言い出した男に面食らった幼女だったが、「早くしろ。」と急かされてしまえば逆らうような度胸はまだ無かった。
「こ、こうですか?」
訳も分からず両手を前に伸ばして見せた幼女に再び木刀を握らせ、構えさせる。
「…この辺りか。」
そう言うなり、ベルトに佩いていた大振りのナイフを抜いて幼女が構えていた木刀の剣先を斬り落とす。
「え!?」
「貸せ。」

「え、あ、はい。」
　見知らぬ男の急な行動に驚愕したのも束の間、マイペースに木刀を渡すように要求してきた男に従う。
「ナ、ナイフで木刀ってそう簡単に斬れるもの何ですか？」
「優れた剣士ならばこの程度造作も無い。」
　恐る恐る、といったように尋ねてくる幼女に答えてやりながら、剣先を斬り落とした木刀をナイフで整えてやる。
　ものの数分で、剣先が斬り落とされて不格好になってしまっていた木刀が新たに蘇った。長さは先程に比べ、２／３程短くなっており、大人にとっては短く使い物にならないが、目の前の幼女にとってはちょうど良いだろう。
「こんなところか…。振ってみろ。」
「は、はい！」
　ずいっと目の前に突き出された木刀を受け取り、構える。
「１、２、３…！」
「止めろ。」
「えっ？！」
　振れと言ったり止めろと言ったり、どうすれば良いのか？そんな顔をして見上げて来

る幼女に、助言する。
「ただ振るのでは無く、打ち下ろす瞬間に左手の小指を意識しろ。右手の力は抜け。」
「は、はい！」
「もう1度やってみろ。」
「はい！1、2、3…！」
ビュッ！ビュッ！
明らかに先程までとは鋭さが違う。先程まではブンブンとどこか間の抜けた音だったのに比べ、今は一刀一刀が空気を斬り裂くように鋭い。
「良いだろう。」
しばらく幼女の素振りの様子を黙って見ていたミホークだったが、徐(おもむろ)に頷く。
「今の感覚を忘れるな。」
「はい！」
いつしか、幼女も何の疑問も無く教えを受けている。そこに、乱入(らんにゅう)する者がいた。
「お――――い！ターニャ、待たせて悪かっ、ぶふぅっ!!!」
駆け寄って来たは良いものの、足元にあった小石にものの見事(みごと)に躓(つまず)き、ヘッドスライディングの如(ごと)き勢いでズッサァァァ――――!!と滑(すべ)ってきた海兵に、ミホークが冷めた視線を送る。

「大丈夫ですか？ロシナンテ少佐。」
ちょうど目の前で止まった海兵を見下ろしながら尋ねる幼女は、どうやらこういった事態に慣れているようだ。
「イッテェ――――…。ドジった…。」
のっそりと立ち上がった海兵の、埃塗(ほこりまみ)れの膝をはたいてやっている幼女がいっそシュールだった。
「悪いなターニャ。待っただろ？って、お前は〝鷹の目〟ミホークか？！」
そこで漸(ようや)く海兵が幼女の傍(かたわ)らに立っていたミホークに気付く。
「え？」
そこで何故かぎょっとしたようにミホークを振り仰(あお)いできた幼女に、ミホークが怪訝(けげん)そうな顔をする。
「おれを知っているのか？」
「当たり前だ！新しい〝七武海〟を知らない海兵がいるか!!だいたい、〝七武海〟とは言え海賊が何でこんな所をウロウロしてんだよ!?」
幼女への問いかけを自分に対してだと思ったらしい海兵ががなる。
「お前に言ったのでは無い。第一、本部内を見て回る権限は与えられている筈(はず)だ。」
しれっと返すミホークに、海兵が言葉に詰まる。その間に、ミホークは改めて幼女へ

問いかけた。
「お前はおれを知っているようだが、何者だ？ただの子どもがこんな所には来れまい。」
「え、あ、おじいちゃんから新しい〝七武海〟が入ったって聞いたので…。」
「？お前の祖父は海兵か。」
「はい。えっと、あらためまして、モンキー・D・ターニャといいます。」
幼女、ターニャが名乗った姓に驚く。
「モンキー、という事はお前の祖父はガープか。」
「はい。」
まじまじと幼女を観察するミホークは知らなかった。幼女―ターニャの方こそミホークの姿に驚いていた事を。
（げ、原作と全然恰好が違うから分かんなかった…。）
そう、今のミホークはあの特徴的な黒いコートも帽子も顎髭も、何よりも〝黒刀〟すら無い。清潔感のあるシャツとパンツ、そして腰に細身の剣と大振りのナイフを佩いただけのその姿は、〝原作〟時の姿からは連想出来ないものだった。
（イ、イケメンだ……!!）
――――これが、後に師弟関係となる2人の出逢いである。
┃12年後、〝新世界〟┃

「そう言えば先生。あたし以外に弟子はお取りになられないんですか？」
酒場兼飯屋で、この島の名物料理らしい、甘辛く煮た挽肉を皿に盛った白米の上に乗せた料理（イメージ的にガパオライスに近い）をスプーンで掬いながら、ターニャが対面に座るミホークに問う。
「急にどうした？」
いきなり妙な事を言い出した弟子に、琥珀色の酒が満たされたグラスを傾けていたミホークが怪訝そうに手を止めた。
「ガルゥ？」
ターニャの足元で生肉を味わっていたドゥーイでさえ、そんな主人を振り仰ぐ。
（何か似てるな、この２人（？）……。）
そんな事を思いながら言葉を続ける。
「いえ。前から疑問ではあったんですが…。確かあたしを鍛えてくださるようになったきっかけが、伸び代があったからだと聞いていたので…。他に弟子がいても不思議は無いんじゃないかと思いまして。」
そう言って料理を頬張るターニャだったが、怪訝そうな顔を崩さないミホークに、目を瞬く。
「おれは剣士だ。」

「それは勿論、知ってますけども。」
急に何を言い出すのか、という顔をしている弟子にミホークが続ける。
「より強い剣士と〝死合う〟事こそ心躍るが、〝育てる〟事には興味が湧かんな。」
そのミホークの言葉に、ターニャが一瞬きょとんとした。
「え？じゃあ、何故あたしを弟子に？」
「気紛れだ。〝強き者〟となり得る者がつまらぬ癖を付けては惜しいと思っただけの事。」
「そ、そうですか…。」
ミホークの珍しい率直な褒め言葉に、ターニャが頬を赤らめる。
「そ、それじゃあ、最近戦った剣士で最も強かったのはどんな剣士ですか？」
何となく気恥ずかしくなり、やや強引に話題を変えたターニャを気にする事も無く、ミホークがグラスを呷った。
「ふむ…。先達て、東の海にて久しく見ない〝強き者〟に出逢った。」
「東の海で、ですか？」
その言葉に、ターニャの〝古い記憶〟がもしやと刺激される。
「どんな剣士ですか？」
「確か名は…、〝ロロノア〟。〝ロロノア・ゾロ〟と言ったな。」

「〝ロロノア・ゾロ〟…。」

やはり、という思いと共にその名を反芻するターニャに、ミホークが言葉を続けた。

「その男はお前の兄の船に乗っているらしい。」

「…先生に認められた男を乗せている、という事はルフィの航海も順調みたいですね。」

ふふふっ、と嬉しそうに微笑む弟子の姿に、ミホークもまた珍しく頬を緩める。

２年振りに再会した師弟の語らいは、その後深夜まで続いた――――――――。

第3話　〝義兄〟も心配してくれているようです

プルプルプルプル…！
プルプルプルプル…！
プルプルプルプル…！
プルプルプルプル…！
プルプルプルプル…！
「ガウ…。」
既に太陽も中天に差し掛かろうとしている頃。
宿の一室で鳴り響く電伝虫に全く気付かずに惰眠を貪る主人の姿に、相棒の小虎・ドゥーイが呆れたように鳴く。人間であれば溜め息を吐いている状態だろうか。
久々に師である〝鷹の目〟と語り合い、少々羽目を外してしまったターニャだったが、元々その前に3日間徹夜していた事もあり、その眠りは深かった。
プルプルプルプル…！
プルプルプルプル…！ゲホッ……!!
ずっとプルプルと言い続けて咳き込み、ちょっと恨めし気に見てくる電伝虫に、

ドゥーイが仕方無いとばかりにターニャの足元からのっそりと身を起こした。
のそのそとベッドを歩き、ターニャの枕元に腰を下ろしてその頬を自身の肉球でムニムニと押す。
「むぅ…。」
「ガルル。」
鬱陶しそうに呻き、手でドゥーイの前脚を払うターニャはまだ夢の世界を彷徨っている。
その間も電伝虫は鳴り続けており、業を煮やしたドゥーイは最終手段に打って出た。
「ガルゥ。」
フンッ、と言わんばかりに鼻息を洩らし、仰向けで寝ているターニャの顔の上に腹這いとなる。
「ぐむ……。」
くぐもった声の後、３０秒程は微動だにしなかったターニャだったが、徐々に手足がバタバタと布団の中で暴れ始めた。
「むぐぐ……!!っっっぶはっ!!!」
やがて手探りで自身の顔の上に〝何か〟がある事に気付いたターニャが、顔の上を陣取っているドゥーイをグイッと胸元まで引き摺り下ろす。

「ゲホッゲホッ……!!!ドゥーイ!!!!殺す気??!」
「ガウッ!!グルルルル…。」
涙目で怒鳴るターニャに、ドゥーイがテーブルの上で鳴り続ける電伝虫の方を振り向いてみせる。
「あ――――…、ゴメン。全然気が付かなかった。」
さっさと出ろ。そう言いた気な目でじとっと見てくる相棒に、ターニャがそそくさとベッドを下りて受話器を取る。
「はい。ターニャです。」
『遅エ。いつまで寝てやがる。』
その瞬間、電伝虫から発せられた声にターニャが目を丸くする。
この聞きようによっては気怠気にも聞こえる、深いテノールは。
「お兄ちゃん?」
縁あって自身と義兄弟の契りを交わした海軍将校、トラファルガー・ローに間違い無かった。
〝原作〟では〝コラソン〟ことロシナンテ〝中佐〟と死に別れ、海賊の道を歩んだローだったが、ふとした運命の悪戯によってロシナンテと共に無事に海軍に保護され、オペオペの実の能力者として海軍入りが半強制的に決定。現在は持ち前の腕っ節とオ

ペオペの能力により、若くして海軍本部准将として活躍している。
保護されて2年程はセンゴクの元で療養していた事もあり、ターニャとは言わば幼馴染の関係にあったが、とある事がきっかけで義兄弟の契りを交わすに至った。
『まだ寝惚けてやがるのか…。相変わらず寝穢いヤツだ。』
「だって、昨日まで3日間完徹だったんだもん。それよりどうしたの？お兄ちゃんから電話かけてくるなんて珍しいよね。」
まだ眠気が完全に醒めておらず、いつもよりも若干口調が幼い。
『…さっきまで寝てたならまだ知らねェんだな？』
「何を？」
珍し……、くも無いが重々しく話を切り出すローに、ターニャが首を傾げる。
『ドンキホーテ・ドフラミンゴが〝王下七武海〟に正式に加盟した。』
「は……？」
信頼する義兄から伝えられた言葉に、ターニャの思考が一瞬停止する。
『しかも、だ。〝七武海〟加盟による恩赦でヴェルゴが釈放された。』
「ヴェルゴが……!!?」
ざっとターニャの顔から一気に血の気が引いていく。
『…これで一応はあいつらも〝政府の狗〟だ。ガープの爺さんもまだ現役。お前に直接

的に手を出して来るとは考え難いが、特にドフラミンゴは目的の為なら手段を選ばねェ。気を付けておくに越した事はねェ。しばらくは大人しくしてろ。警戒を怠るな。』

「うん…。」

『万が一、何か変わった事があったらすぐにおれに連絡しろ。おれじゃなくても、ガープの爺さんでもコラさんでも良い。深夜だろうが早朝だろうが、だ。』

電話越しでも分かる恐怖に声を震わす義妹に、ローが気遣うように言い聞かせる。

「うん。分かった…。しばらくこの島に滞在して…、ううん。やっぱりしばらくの間マリンフォードに帰ろうかな…。お祖父ちゃんかお兄ちゃん、どっちかでも良いから海軍本部にいる…?」

恐る恐る、といった様子で尋ねてくる義妹を安心させるようにローも頷く。

『ああ。センゴクのジジイが気を使ったらしい。おれもガープの爺さんも、しばらくは遠征も演習もねェ。しばらく本部に詰めてろだと。』

「良かった…。じゃあ、今日にでも出発するね。早くて5日位かな…?そっちに着くの。」

ターニャが義兄と祖父の本部詰めに安堵の息を洩らす。

『電伝虫はいつでも繋がるようにしておけ。もし7日以上かかるようなら連絡しろ。良

いな？』
「分かった。じゃあ、今から準備するから、またね。」
『気を付けろ。』
　ブツッと声を上げて通話を切った電伝虫に受話器を戻そうとして、ターニャは自身の手がずっと震えていた事に気付く。
「ガゥ？」
「大丈夫。心配してくれてありがと…。大丈夫だから…。」
　様子のおかしいターニャを心配して足元に摺り寄るドゥーイを抱き締めつつ、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。
　ドンキホーテ・ドフラミンゴ。そしてヴェルゴ。この２人の海賊は、ターニャにとっても浅からぬ縁を持つ者たちだった。１１年前、偶然が重なったとは言え、ヴェルゴが海賊である事を暴いたのは、幼き日のターニャであったからである。
　それがきっかけとなってドフラミンゴの計画に罅が生じ、またヴェルゴが海賊のスパイである事が明らかとなった事でロシナンテは死なずに済み、ローと共に海軍へと保護された。
　ドレスローザの平和も脅かされる事無く、様々な事が積み重なった事によってドフラミンゴの〝七武海〟入りも話自体出てこなかった為、てっきりこのまま一海賊のままか

とも思っていたのだが…。

「今になって…。」

ドゥーイを抱き締めたまま深呼吸を繰り返し、ターニャは11年前の事を思い返していた――――――。

第４話　バタフライ・エフェクトの恐ろしさを知りました

―海軍本部―

カツ！コツ！カツ……！

海軍本部の廊下を足早に歩くのは１人の海軍将校。スラリと伸びた肢体を仕立ての良いスーツに包み、肩にかけるのは〝正義〟が記す白いコート。

眉間には深い皺が刻まれ、目の下には濃い隈が浮き出ているが、その秀麗な面差しは全く損なわれていない。

モンキー・Ｄ・ターニャの義兄弟にして海軍本部・准将、トラファルガー・ロー。彼は今、彼自身とも関わりの深いとある人物の下へと向かっていた。

コンコンコンッ！

ガチャッ……！

ある扉の前で立ち止まり、ノックをするなり返事も待たずに扉を開ける。

「なんじゃ、ローか。ノックをしたなら返事するまで待たんかい。」

何事かと奥のデスクで書類から顔を上げたのは〝海軍の英雄〟とも謳われる老将、モ

ンキー・D・ガープ。
それに構わず、ガープの下へと歩み寄ったローがガープに囁く。
「ターニャと連絡が取れた。」
「！無事じゃったか!!」
謝罪も前置きも一切省いて簡潔に告げたローだったが、その知らせは何よりもガープが待ち望んでいたものだった。
「こっちの気も知らずに呑気に寝ていたらしい。まぁ、ターニャは一旦海に出ればほぼ不眠不休での航海だから、仕方無ェと言えばその通りだがな。」
「そうか…。それで、伝えたのか？」
「何も知らなきゃ、自衛も出来ねェだろう？伝えたさ。驚いちゃいたが冷静だったぜ。まぁ、ショックはでかかったようだが…。一旦マリンフォードに戻ってきて、しばらく滞在するとさ。おれかあんたが本部にいるかどうかを確認してきた。」
「そうか…。到着はいつ頃になる？」
「早くて5日。ターニャの船ならもっと早いかもしれねェが、これぱっかりは海次第だな…。7日以上かかるようなら連絡を寄越せと念を押しておいた。」
「そうか。そうか……。」
大きく息を吐きながら、革張りの椅子に背を預けたガープにローが尋ねる。

「…話には聞いていたが、ヴェルゴってのはターニャにとってそんなにトラウマなのか？」

「トラウマにもなるわい。一歩間違ったら殺されとった。…助かったのは運が良かっただけじゃ。」

「?!…一体何があったってんだ?」

ガープの言葉に一瞬息を呑んだローだったが、下手に義妹のトラウマを押さない為にも把握しておくべく尋ねた。

そして、ガープは語る。11年前の、あの日の事を――――――。

―11年前、マリンフォード―

その日、ターニャはいつもの如く鍛錬場で素振りを終えた後、持参した弁当を食べた後で強烈な眠気と戦っていた。前日の夜にうっかり本に夢中になって夜更かししてしまい、満腹になった途端に瞼が重くなってきたのである。

「…ダメだ、眠い……。」

普段よりも2時間足りない睡眠では、子どもの体力などすぐに尽きてしまう。マリンフォードの祖父の家は中心街からは若干距離があり、今の状態で無事に帰り着ける気はしなかった。

生憎祖父は今朝早くから遠征に出ており、帰るのは明日の夕方。今日はつる中将の家

に世話になる予定だったが、1人で勝手にお邪魔する訳にもいかず、肝心のつるも現在は仕事中。まさか執務室を訪ねて昼寝させて欲しいとも頼めない。

いや、つるならば子どもが遠慮するんじゃない、とすんなり寝かせてくれるだろうが、仕事の邪魔をするのは本意では無かった。

どこか邪魔にならないような所は無いか、と辺りを見回したところで、鍛錬場の隅に植えられた枝振りの良い樹が目に入る。

「あの上なら、まぁ邪魔にはならないかな…？」

独り言ちて愛用の木刀をベルトに差し、スルスルと樹に登る。ちょうど良さそうな太い枝を跨ぐようにして座り、幹にもたれて眠気に身を任せる。

――――――それからどれくらい経ったのか。

ターニャは誰かの話し声で目を覚ました。

「……？」

まだぼんやりとしている意識の中、ぐしぐしと目を擦り耳を澄ます。辺りを憚るような会話だったが、周囲に他に人気は無い為、意外にも会話が正確に聞こえてくる。

ちょうど昼過ぎから夕方までの間は、訓練時間からはズレており、鍛錬場を使う者はおらず、ターニャ自身もこの時間ならば、と祖父が特別に使用許可を取ってくれたからこそこの場にいるのである。

（誰だろう。サボり…？）

寝起きでぼんやりとした頭では分からなかったが、徐々に頭がはっきりしていくにつれてターニャの顔が青褪めていく。

「ああ。問題無いよドフィ。〝潜入〟して間も無く1年…。そろそろ次の手を打っても良い頃だ。」

『フッフッフ!!それは何よりだ。ヴェルゴ、やっぱりお前に任せて正解だったよ、〝相棒〟。』

〝ドフィ〟、〝潜入〟、〝ヴェルゴ〟。

マズい。状況を理解して、最初に思った事がそれだった。

聞いてはいけない会話を聞いてしまった。見つかったら間違い無く殺されるだろう。

「取り敢えず、〝異動願い〟を出しておく。Ｇ５ならばちょうど良いだろう。」

『フフフ、フッフッフ!!この件はお前に一任してるんだ。お前のやり易いようにやってくれ！』

口を両手で塞ぎ、ターニャが樹の上に隠れたまま必死に息を殺すが、結果的にそれが裏目に出てしまった。

それまでターニャが見付からなかったのは、眠っていた為に気配がほとんど消されていた事にある。

しかし、状況を理解してしまったが為に緊張のあまりに体が強張り、呼吸も乱れて気配を察知されてしまったのである。

「！すまない、ドフィ。また改めて連絡しよう。」

『？どうした、ヴェルゴ。』

「おれとした事が、ネズミが1匹紛れていた事に気付かなかったようだ。」

（ヤバイ……!!!!）

ガササッ!!

その瞬間、ターニャを突き動かしたのは、圧倒的強者に対する恐怖から来る生存本能だった。

考えるよりも先に、樹から飛び降りて全力で走る。伊達に物心付く前から祖父に鍛えらえてきた訳では無い。その身の軽さを最大限に生かした瞬発力は侮れず、状況によっては鍛えられた海兵相手であっても振り切る事が出来る。

だが、今回ばかりは相手が悪かった。

ドゴンッ!!

「っ!!!?」

激しい衝撃と共にメキャリ、と嫌な音が響いたと思った瞬間には、地面に叩き付けられていた。

「あ？つぐう……!!」
叩き付けられた衝撃で声が洩れるが、更に一拍置いて激痛がターニャを襲う。顔の左半分は、既に痛み以外の感覚が無い。
信じられない程の力で殴られたと気付いたのは、ヴェルゴの言葉を聞いた後だった。
「子ども…？ああ、君がガープ中将の孫か。全く、運が無いな。」
「っ……!!」
感じた事の無い激痛に声も出せなかったが、直後に右足に衝撃が走る。
「ぎっぃ……!!」
喉に引っかかるようにした〝音〟が洩れ出るが、間髪入れずに腹部を蹴り飛ばされた。
「がふっ……!!ゲホッゲホッガハッ!!」
蹴られた瞬間に、ターニャが嘔吐し、血の混じった吐瀉物が周囲を汚した。
「っち…！掃除が面倒だな。君も、こんな場面に居合わせなければ、死なずに済んだものを。悪いが、このまま〝消えて〟もらう。」
一片の慈悲も無い言葉に、既に身動きすら儘ならないターニャが辛うじて目でヴェルゴを仰ぎ見た瞬間、ターニャに向かって振り下ろされる拳が目に入った。
（あぁ、しんだ……。）

ターニャが一瞬、自身の生を諦めた瞬間だった。
パキキキキキ…!
パキイィィイイン……!!
ヴェルゴの体が、一瞬にして凍り付く。
「オイオイオイ、こりゃぁ一体どういう事だ?」
不意に訪れた静寂の中、1人の男の声とザリッ、と靴底で砂が擦れる音が響いた。
「ターニャ、大丈夫か?まだ生きてるな?」
自身が凍らせた下手人を一先ず放置し、顔見知りでもある被害者をそっと抱き上げる。
「く、ざ…、じさ……?」
「ああ、〝クザンおじさん〟だ。良く頑張ったな。今、救護室に連れていってやる。」
ターニャの途切れ途切れの声を正確に聴き取ったクザンが、安心させるように告げる。
「そ、かいへ…。」
「ああ、大丈夫だ。殺しちゃいない。」
その海兵、と安否を気にするように訴えるターニャに伝えるが、否定するようにほとんど動かせない体を酷使するかのように、僅かに頭を振った。

「ん?どうした?」
「かいぞ、…パイ…。」
絞り出すようにクザンに伝え、ふっと意識を失ったターニャを負担がかからないように抱え直し、極力揺れないように救護室に走りながら、クザンがターニャの言葉を反芻する。
（海賊、スパイ、だと……?）
こんな洒落にならないような嘘を吐くような子どもでは無い。何よりも、あの海兵が本当に海賊のスパイだと言うならばそれを知ってしまったターニャを口封じに殺そうとしたのだ、とあの異様な状況にも納得する事が出来る。
（コング元帥に報告しなきゃならねェな。）
真夏という訳でも無い現在の気候なら、氷が解けるまでには時間がかかる。逃げられる心配は無いだろうが、長時間放置してしまえば死ぬだろう。せいぜい保って１０数分。ターニャを救護室に預けた後、元帥に報告する前にあの海兵を回収して解凍せねばならなかった。
――――――それからの騒ぎは、筆舌に尽くし難いものだった。海軍本部内に海賊からのスパイが入り込み、一般人の子どもを虐殺しかけたのである。
この事件は、その衝撃性から世界政府幹部や一定以上の海軍将校以外には完全に

隠匿される事となった。もし、外部に洩れてしまえば、海軍の信用は地に堕ちる。海軍本部史上、最悪のスキャンダルになりかねず、公表するにはリスクしか無かった為である。

――――――ガープから伝えられた、秘められていた〝真実〟にローの驚愕は大きかった。

「……たまたまクザンが居合わせとらんかったら、そのままターニャは殺されて海にでも投げ込まれて〝行方不明〟として処理されておっただろう。クザンがターニャを見付けた時、既にターニャは虫の息だったらしい。顔の形が変わる程殴られ、折れた肋骨が胃や腸に刺さってぐちゃぐちゃになっておったそうだ……。」

「…当時、ターニャはまだ6歳かそこらだろう?!大の大人、それも海賊ならそこまでする必要はねェ筈だ!!」

何よりも、義妹に降りかかった、想像していたよりも遥かに凄惨な行為に、思わずローが叫ぶ。

「ああ、その通りだとも!!センゴクの奴に力尽くで止められなかったら、わしがあの男を殺していたところじゃった!!!」

ズンッ!!!

「……!」

当時を思い出し激昂するあまりに覇気すら洩れ出ているガープに、ローが息を詰めた。

執務室の床や壁、天井や扉がミシミシと軋む音がする。

「ぐっ……！おい、落ち着け爺さん!!」

全く制御される事なく放たれる覇王色の覇気を間近で浴びせられ、堪らずに膝を付いたローがガープに声を張り上げる。

「……幸い、虫の息ではあったもののターニャは生きていた。もう殉職してしまったが、当時海軍に所属していた〝チユチユの実〟の能力者によって傷も完全に癒えたが、心の方はそうはいかん…。」

数回深呼吸を繰り返して何とか自身を落ち着かせたガープが続けた。

「それ以来、男の海兵を異常に怖がるようになっての…。既に克服してはいるが、当時は酷いものじゃった。わしやセンゴク、クザンやロシナンテなど付き合いの長い海兵は大丈夫だったが、他の者は全くダメでな…。顔を合わせたら最後、過呼吸を引き起こす程じゃった。…その辺りの事はお前も良く知っとるじゃろう？」

「ああ…。」

自身が初めて逢った頃の義妹を思い出し、納得する。それだけの事が身に起こっていたのなら、無理も無いと言えた。

11年前、恐らくその事件から3ヵ月程経った頃だろう。その頃のターニャは、今と比べ物にならない程に表情が無く、唯一表に出す感情は〝怯え〟だけだったのだ。

第５話　それは１つの始まりでした

―11年前、マリンフォード―

「コラさん、この家が…？」

「ああ。センゴクさんの家だ。ロー、ここが今日からお前の家になる。」

中心街からはやや離れた場所にある、一兵卒やその家族らが住む区間とは一線を画する閑静な住宅街。ここは、将校たちの中でも中将以上の者とその家族らが住む区間である。

そこの中でも一際大きな門構えの、ワの国風の木造平屋の一軒建て。

その門の前に、２人の人影が立っていた。１人は白いモコモコのファーで出来た帽子を被った少年、もう１人はシンプルな白いシャツと黒のパンツ姿だが、体中包帯だらけで松葉杖を付いた、身長３ｍは超えるだろう大男。

少年の名は、トラファルガー・ロー。

かつては大切な者たちを失った事への絶望と、世界政府への憎しみから世界を滅ぼしたいとさえ願っていたが、傍らの青年へと心を開き、また自身を蝕む不治の病〝白鉛病〟を完治させられるかもしれない、という希望を得てからは少しずつ年相応の姿を取り

戻しつつあった。

そして、その隣にいるのが、〝コラさん〟こそ〝コラソン〟としてドンキホーテ・ファミリーへと潜入していた海兵、ドンキホーテ・ロシナンテ。

ドンキホーテ・ファミリーボス、ドンキホーテ・ドフラミンゴの実弟だが、幼い頃に実の父を殺した兄への恐怖で逃げ出したところを当時海軍本部の中将であったセンゴクに拾われ、養子として育てられた。やがて自身も海兵となった彼は、海軍本部の中佐に登り詰め、そして生き別れになった兄―ドフラミンゴの暴挙を止めるべくドンキホーテ・ファミリーへと潜入。そこで海軍に情報を流していたが、ローと出会い、紆余曲折の末に彼の病を治す為にローを連れてファミリーを出奔。その過程でローと親子のような絆を得た。

ロシナンテは、生きて帰って来れた、という感慨深いような顔をしているが、ローの顔色は冴えない。

〝オペオペの実〟を食べ、海軍に〝保護〟された事でローの未来は決まってしまった。自身の能力で〝白鉛病〟を完治させた後は、15歳になるのを待って強制的に海軍に入隊する事となったのである。

本来は完治次第入隊させられる筈だったが、ローの後見人となったセンゴクが世界政府の上層部に〝待った〟をかけたのだ。これまでの闘病によって削られたローの体力

等を考慮し、ある程度体が成長して鍛えられるまで待つべきだ、と。

ロシナンテの一件で多少立場が悪くなった時期もあったセンゴクだが、さすがの世界政府も海軍本部の中でも指折りの実力者であり〝大将〟への昇格は確実、まして未来の〝元帥〟候補であるセンゴクを降格させるような真似は出来なかった。結果的に、ガープやクザンらの同意と、何よりも現元帥コングの後押しもあってセンゴクの意見が通り、ローの正式入隊は１５歳の誕生日を待つ事となり、そのままセンゴクが後見人となったのである。

後見人となり、また実際に顔を合わせた時に自身の故郷であるフレバンスへの仕打ちについてローに向かって頭を下げ、全面的に世界政府側の否を認めたセンゴクの事は嫌いではない。ロシナンテを育てただけあり、その真っ直ぐさにも好感が持てた。

ロシナンテとセンゴクのような海兵を知った事で、全ての海兵が腐っているとは、今のローはもう思わなかった。本当に憎いのは世界政府の上層部とフレバンスを捨てて自分たちだけで逃亡を図った王族の人間である。

しかし、これまで嫌悪していた組織に強制的に入隊させられると知り、はいそうですか、と納得出来る程大人でも無かった。

「？どうした、ロー。」

微妙な顔をしていたローに気付いたロシナンテがローを見下ろすが、首を振って

誤魔化す。

「いや、何でもねェよコラさん。」

目の前の恩人にだけは言う訳にはいかなかった。

ロシナンテはローの為に任務を一時放棄し、〝オペオペの実〟を盗んだ。最終的に〝オペオペの実の能力者〟であるローを無事に〝保護〟という名目で懐に入れる事が出来たからこそ懲戒免職を免れたものの、全くのお咎め無しという訳にはいかず、3ヵ月の謹慎処分と三等兵への降格。これまで築き上げた実績は完全に〝無〟となってしまったのである。

まして、漸く退院出来たとは言え今日まで入院していた重傷者である。無用な心配をかけるのは本意では無い。そんな彼に、海軍に入りたくないとは言えなかった。

ロシナンテに悟られない程度に軽く溜息を吐きつつ、ローが促す。

「さっさと中に入ろうぜ、コラさん。いつまでもここに突っ立ってたって仕方無ェんだし。」

そう言い置いてスタスタと門を潜ってしまうローに、首を傾げながらもロシナンテも続いた。

ガラガラガラ…

「おお!やっと来たか!」

玄関の引き戸を開けた途端に響いた声に、ロシナンテが一瞬呆気に取られる。
「ガ、ガープ中将!?何故ここに??!」
目の前に立っていたのは、自身の養父であるセンゴクの新兵時代からの腐れ縁、〝英雄〟と名高いモンキー・Ｄ・ガープ中将だった。ローも１度顔を合わせた為、見知った相手ではある。センゴク同様、〝フレバンス〟の一件について謝ってくれた。
「何じゃ、センゴクから聞いとらんのか?」
「な、何をですか?」
ガープの方が意外そうな顔を見せた事に驚きつつ、否定する。
「わしもこれから遠征に行かねばならなくての。その間お前たちにターニャを預かってもらおうとした訳じゃ。センゴクの奴は自分からロシナンテに言っておく、と言っておったが、本当に聞いとらんのか?」
「そう言われれば、センゴクさんが演習に出かける前に〝大事な預かりもの〟があるから早く家に帰れ、と言っていたような…。」
出がけにトラブルが起こったらしく、珍しくバタバタと出かけて行ったので肝心な事を言い忘れていたのだろう。
「たぶんそれじゃろうな。あいつももっと分かりやすく言ってやれば良いものを…。」
「ははは…。それよりターニャはどこに?」

呆れたように呟くガープに苦笑しつつ、ロシナンテが肝心のターニャの居場所を尋ねる。

「うむ。実は今病院におっての…。」

「病院に?風邪でも引いたんですか?」

珍しい、と言いたげなロシナンテの言葉に、ガープが一瞬言葉に詰まった。

「いや、そういう訳でも無いんじゃが…。お前が任務に出とる間に色々あっての…。実は今、ターニャは定期的に病院でカウンセリングを受け取るんじゃよ。」

「カウンセリング?」

「詳しい事は言えんが、3ヵ月程前に大怪我をしてな…。その時の事がきっかけで、今男の海兵の姿を見ると怯えるようになってしまってな…。幸い、わしやセンゴク、クザンは平気じゃからロシナンテ、お前も大丈夫じゃろう。」

「大怪我って、もう大丈夫何ですか?!そんなトラウマが残る程の!?」

「怪我はすっかり良いんじゃが、問題はな…。ともかく、わしもそろそろ行かねばならん。お前たちでターニャを迎えに行っとくれ。ターニャには既にロシナンテたちが行くと言ってある。じゃあ、頼んだぞ!」

そう言い置いて足早に靴を履いて出て行ってしまったガープを、黙って見送ってしまったローが呟く。

「相変わらずスゲェ勢いのあるじーさんだな。…なぁコラさん、…コラさん？」
「あ、あァ。何だロー。」
「そのターニャってのは一体誰だ？」
　ボケっとしていたロシナンテを仰ぎ見ながら尋ねる。
「ターニャはガープさんの孫娘でな。確か…、今６歳になったトコだったかな？」
「…だったら、早いトコ迎えに行かねェといけねェんじゃねェのか？」
　そんな子どもこれからしばらく一緒に暮らさなくてはいけないのは憂鬱だが、そんな年齢では放置する訳にもいかない。一般的に見れば、まだ充分に庇護が必要な年齢である事は明白であるし、それとローの個人的な感情は別物である。
　それだけの分別はローとて心得ていた。
「…そうだな。早エトコ迎えに行ってやんねェとな。行こうぜ、ローってイッテェ!!!」
　まずは自身の疑問よりもターニャの迎えを優先したらしいロシナンテが踵を返そうとし、見事に松葉杖を滑らせてビタンッ！と勢い良くスッ転ぶ。相変わらずなロシナンテに溜息を吐きつつ、ローは黙って手を貸した。
　何とか病院に辿り着くと（ロシナンテはそれまでに３回転んだ）、目的の子ども―ターニャは待合室で行儀良く座っていた。
　この時の事を、ローは１１年経った今も、嫌に鮮明に覚えている。

ロシナンテを見付け、こちらに駆け寄ってくる子どもの顔には、全く感情が浮かんでいなかった。

そんな人間をローは以前にも見た事があったのだ。ローの父親は国1番の医者であったから、毎日様々な患者が父を頼ってきた。

その中に、精神的なショックがきっかけで表情を変えられなくなってしまった少年がいた。表情筋が麻痺しているという訳では無く、何も感じていない訳でも無い。ただ、感情が表に出なくなってしまったというケースだった。

目の前に立つ子ども―ターニャはその時の少年を連想させる。

恐らくは、元々感情豊かな子どもだったのだろう。ロシナンテは子どもの予想を超えた様子にショックを受けているらしく、ローの隣で固まってしまっていた。

「ロシナンテさん…？」

そんなロシナンテに、ターニャも困惑している様子だった。表情は変わらないが声にそれが表れており、目にも微妙な感情の変化が見て取れた。

〝心〟まで閉ざしてしまった訳では無い。ただ表に出てこないだけ。これならばまだ間に合う。

ローが1歩前に出る。

「おれはロー。トラファルガー・ローだ。お前は？」

そんなローに目を向け、１つ瞬いたターニャは、表情は動かないものの目だけはその感情を如実に表していた。困惑したような様子から、どこか安堵したような光がその目に宿っている。

「モンキー・Ｄ・ターニャです。初めまして。」

それが、後に義兄弟としての契りを結び、無二の絆を得る２人の出逢いだった。

第6話　運命のレールがズレたようです

ザザザザザザ……!!!

夜の海を1艘の小型船が走る。

煌々と輝く月と、空一面に煌めく星の光を頼りに、ターニャが海を渡る。もし、その光景を見る者がいたならば驚愕しただろう。

ターニャの船は、一言で言うならば帆と舵の付いたカヌー。船体を安定させる為に、船本体の横に〝アウトリガー〟と呼ばれる特殊な浮が固定されており、その浮と船体を筏のように組まれた木材が繋いでいる。

居住性を一切無視しているが故に、扱いが酷く難しい代わりに機動性を重視したこの船は、使い熟す事さえ出来れば通常なら1日かかる航路でも数時間で走破する事が出来る程に船脚が速い。扱いの難しさ故に数は少なくなったものの、未だにこうしたカヌーを使用している漁村も存在し、〝南の海〟の1部の島や、〝偉大なる航路〟でも時折見る事が出来る。

しかし、それはあくまでも短期間の航海の話である。居住性が全く無い為、はっきり言って、長期間の航海には全く向かない上に船が小さい為に波や風の影響を受け易い。

まして〝新世界〟を単身航海するなど、正気の沙汰では無かったが、ターニャは１５歳の時に旅立って２年、この船で〝新世界〟を渡っていた。

その並外れた航海術、並びに操船技術がそれを可能としていたのである。

ザザザザザザザザザザ……!!!

時刻は既に深夜と言っても良い時間帯だったが、１度海に出ればターニャは何があっても眠らない。２４時間、風と波を読み舵を取り続ける。今も、星と〝ビブルカード〟を道標にマリンフォードを目指していた。

傍らには、相棒の小虎―ドゥーイが眠っている。

その寝顔を見下ろしてクスリ、と笑みを１つ溢し、星の位置を測っていた時だった。

不意に前方に巨大な船影を見付ける。

「あれは…、〝白ひげ〟？」

距離にしてまだ数ｋｍ離れているが、その船は遠目に見ても目立つ。鯨を模した巨大な本船に先行するように進む、３隻の船。旗印は同様に〝白ひげ海賊団〟のもの。

「そう言えば、この辺に〝白ひげ〟の縄張りがあったっけ？」

職業柄〝四皇〟の縄張りにはあまり近付かないようにしてはいたものの、補給の為にそう言っていられない事もある。そうした際には、出来るだけ〝白ひげ〟か〝赤髪〟の縄張りを利用するようにしていた。実際に縄張りしている者の性格によるのか、はたま

たそういった所を選んで縄張りにしているのか、〝白ひげ〟や〝赤髪〟の縄張りの人間は基本的に大らかで懐の広い者が多く、実際に島で悪さをしない限りは他の海賊や賞金稼ぎの入島を拒みはしない。

彼らの船の進んできた方向は、ちょうど以前ターニャ自身も寄った事のある縄張りの方向である。

大きな船の近くでは波に呑まれる危険もある。何よりも下手に警戒されるのはゴメンだった。〝白ひげ海賊団〟は小物にかまける程喧嘩っ早くは無いが、何しろ１０００人を優に超える大所帯である。中には例外もいるだろう。

白ひげ海賊団がターニャを見付けるより先に迂回するに限る。

そんな思いの下、手早く方向を変えた。１０分程走らせれば、ターニャの船はちょうど〝白ひげ〟の本船―〝モビーディック号〟の後方を横切るように回り込む形となる。

間も無く〝モビーディック号〟と平行に並ぶだろう、という頃。

ターニャが風が変わったのを肌で感じ取る。

「…嵐が来る。」

〝新世界〟の海にしては珍しくも穏やかな夜だったが、ここへきて空が陰り始める。

波も徐々に高くなり、風も強くなるがターニャは至って冷静だった。〝サイクロン〟が吹き荒れる真横をギリギリで回避した経験も数え切れない。それに比べれば何と優

しい事か。

〝モビーディック号〟の後方２ｋｍ程を横切る頃には波風は激しさを増し、ぐっすりと眠っていたドゥーイも目を覚ましていた。

「ドゥーイ！今のうちに〝中〟に入って!!」

「ガウッ！」

ターニャの指示にドゥーイが即座に従い、船体の前方の〝蓋〟を外す。ターニャの船は居住スペースが無い代わりに、船体の１部が空洞になっており、食料や荷物が収納出来るようになっている。普段は海賊などに襲われても分からないように〝仕込み蓋〟で隠されているが、こうした嵐の時などにはドゥーイの避難先としても重宝していた。

器用に爪を引っかけてドゥーイが再び蓋を閉めた事を確認し、風を受けて加速するべく帆を調整しようとした時だった。

波と風の音しか聞こえなかった真夜中の海の中、突然異質な音を聴き取った。

「！今のは…。」

ゴォオオオオオ……!!

ザァアアアアア……!!

吹き荒れる風と荒れ狂う波の音の中で耳を澄ます。

「っ…!!」

微かに聞こえる、人の声と必死に波の中で蹠く音。

「！誰か落ちた……?!」

周囲を見渡す限り、他に船影は無い。何よりもこのタイミング、間違い無く〝白ひげ海賊団〟の誰かだろう。

だが、〝白ひげ〟の船が止まる様子は無い。巨大な帆船は嵐の大風を追い風に速度を増している。もう人の身では追い付けまい。このまま真夜中の海を泳ぎ続ける事はまず不可能。この海域は〝秋島〟が近く、水温も低い。ましてここは〝新世界〟で今まさに嵐の真っ只中。このまま放置すれば1時間どころか10分と保たずに沈んでもおかしく無い。

「気付いていない…?!見張りは何をしてるの!?」

どうする?相手は海賊。助ける義理も無い、しかし……。

迷ったのは一瞬。

「っしょうがない!!」

海賊相手とは言え、見殺しにするのは寝覚めが悪い。

海軍に引き渡したところで、〝白ひげ〟が黙っていない事は分かりきっており、気絶させるなりしてこの近くの縄張りに送り届けた方が無難だろう。

とんだ寄り道だと内心舌打ちながらも、船首目がけてジャンプする事で船の方向を変

える。
ザザザザァ……!!
２分と経たないうちに声がした付近へ辿り着くが、辺りに人影は既に見当たらなかった。
「全く……!!」
手早く飾りベルトから帯刀していた鬼徹を抜き、ドゥーイが隠れている収納スペースからロープを取り出す。
「ガウ?」
中に入ったまま、何事かと見上げてくるドゥーイに「ちょっと寄り道するね。」とだけ告げ、再び蓋を閉めた。
「良し。」
取り出したロープをマストに結び付け、逆側を自分の腰に結ぶ。
そして呼吸を整えると同時に海へと飛び込んだ。
バッシャアアンッ!!
漆黒の海の中、潮の流れに流されないように水をかき分け、見聞色の覇気を駆使して沈んだ相手を探す。
（！いた……！）

肉眼では全く捉えられないが、１０ｍ程潜ったところに漂う人間がいる。

（まだ生きてる…！）

思い切り水を蹴り、腕を伸ばした。

（もう少し…！良し、届いた!!）

海中を漂っていた男の腕を掴み、一気に海面を目指す。自身の腰に結び付けたロープを辿り、浮上する。

「ぶはっ!!!」

掴んだ腕を離さないように船へと這い上がり、男を引き上げる。

「せぇのっ!!!」

激しい風と波に翻弄されながらも、何とか引き上げる事に成功した。

「やれやれ…。」

引き上げた男を見れば完全に意識が堕ち、腹部から出血しているのが分かる。幸い急所からは外れているようだが、海に落ちたのが悪かったのか体温が下がり、出血も止まらない。

このまま揺れる船の上での手当ては難しい。何よりもこれ以上舵を放っておけば、完全に方向を見失ってしまう。

取り敢えず収納スペースからタオルを取り出し、服の上から傷口に当てて解いたロー

プをその上に巻き付けて圧迫(あっぱく)した。
「ガルル…。」
「さ、もっかい〝中〟に入って、ドゥーイ。ちょっと強硬突破(きょうこう)するから揺れるよ。」
胡散臭(くさんくさ)そうな目で男を見るドゥーイに、声をかけ再び船の方向を変えた。
手元の〝ビブルカード〟を見て、方向を確かめる。
「マリンフォードがこっち、って事はこの方向で合ってるね。さぁ、行くよドゥーイ。早く入って!!」
言うや否(いな)や、帆(ほ)を張り風を受ける。
ザザザザザザ……!!
一気に船が加速し、〝白ひげ〟の縄張りを目指して走り出す。
ターニャが、自身が助けた海賊の正体を知り、驚愕するのはそのわずか１時間後の事である。
――――――――――再び運命が動きだそうとしていた。

第7話　実はこれが初対面でした

ターニャは予想を超えてきた事態に、内心頭を抱えていた。

あれから嵐の中、船を走らせる事約1時間。無事に〝白ひげ〟の縄張りに辿り着き、以前ちょっとした事で世話になった島で唯一の診療所を訪ねて医者を叩き起こし、助けた男を診せた。

結果的に言えば男は助かった。海に落ちた事で体温は下がってはいたものの、すぐに引き上げて止血したのが良かったらしく、島に着いた時には出血もほとんど止まっており、朝には目を覚ますだろうとも言われている。

しかし、そこからの騒ぎは大変なものだった。

灯りの一切無い深夜の海、良く見知った相手ならばともかく、初めて会った他人の顔の判別などほぼ不可能である。

だからこそ気が付かなかったのだ。

――――――――――助けた相手が、〝白ひげ海賊団〟の4番隊隊長だった事に。

〝白ひげ海賊団〟4番隊隊長―サッチ。〝原作〟において歴史を塗り変えた戦争、〝頂上戦争〟の引鉄となった男。

〝原作〟の大まかな知識はまだ記憶に残っている。流石に１７年も前の事である為、細かい事は忘れてしまっているし、主要人物以外の顔も曖昧だが、名前位はまだ覚えていた。

その為、この男―サッチの事もその存在は覚えていたし、手配書で顔を確認する位の事はしていた。しかし、それは別にこの男を助けて戦争を止めよう、という殊勝なものでは無く、戦争のきっかけとなった男の顔位は確認しておこうという単なる知的好奇心によるものである。

〝頂上戦争〟に介入する隙はほぼ無い。いくら英雄の孫で、現在の海軍将校たちの中には懇意にしている者たちも多いとは言え、ターニャ自身は海兵でも何でも無く賞金稼ぎ。言わばただの一般人である。仮に忍び込めたとしても、祖父や義兄の見聞色までは誤魔化せない。間違い無く５分と経たずに見付かって説教コースである。

しかし、黙って何もしないつもりも無かった。

ターニャと〝火拳のエース〟には直接の接点も交流も無い。エースが義兄弟の契りを交わしたのはターニャでなくルフィであり、ターニャとは顔を合わせた事も無いのだ。

ターニャは幼い頃からフーシャ村とマリンフォードを行き来しており、ルフィも７歳からはほぼコルボ山で過ごしていた。お互い、祖父によって時折フーシャ村に戻されて

一緒に過ごす事もあったし、手紙のやり取りもしていたが、双子とは言え生活環境はまるで違った為である。

ターニャは〝原作知識〟の他に、ルフィの口から直接エースともう1人の義兄(あに)の事を聞いていたし、恐らくはエースもターニャの存在位は知っている筈(はず)だ。

ターニャ自身はエースに対して何の感情も抱(いだ)いてはいないし、それは向こうも同じだろう。

だが、ルフィは違う。

エースが死ねばルフィは悲しむ。消えない心の傷を負う事になるだろう。

離れていた期間が長かったが、ルフィはターニャの大切な兄である。義兄(ローエース)に向ける信頼と尊敬とはまた違う、どこまでも対等な相棒のような存在。

ルフィの為に、エースを見殺しにする訳にはいかなかった。

エースを喪(うしな)えばルフィは更に強くなるかもしれない。でも、その代わりに心の一部を失うだろう。そんなルフィは見たく無い。

どこまでも自分本位な考えである事は理解しているが、ターニャも自分を曲げるつもりは無かった。

エースを確実に助ける為には、戦争を起こさせない事が1番確実である。

その為にターニャが考えていたのは、〝黒ひげ〟がエースを捕える前に、ターニャが

〝黒ひげ〟を狩る事。インペルダウンに送っただけでは、〝原作〟のような脱獄事件を起こすかもしれない。悪運だけは強い様子だったから。

１度〝海賊〟を自称し、髑髏を掲げたからには、情状酌量の余地は無い。例え正式に手配書が発行されていなかったとしても〝ＤＥＡＤ ＯＲ ＡＬＩＶＥ〟が適用される。仮にターニャが〝黒ひげ海賊団〟を全員手にかけたとしても、罪に問われる事は無い。

――――エースよりも先に〝黒ひげ〟を見付けて、確実に殺す。

それが、ここ数年の間にターニャが考え付いた〝対策〟だった。

だからこそ、自身が１７歳を迎えたこの数ヵ月の間、新聞を隅々までチェックし、時期を見極めていたのだ。

しかし、まさかそこまでして回避したいと考えていた戦争の引鉄となった男を助ける事になるとは、夢にも思っていなかった。

てっきり下っ端とばかり思っていた相手がまさかの幹部、それも隊長だったとは…。

当然、診療所の医者も気付き、慌てふためいて島長の所へ連絡が行った。

島長から〝白ひげ海賊団〟の本船へと連絡が行き（万が一海賊の襲来などの非常事態が起こった時の為に、縄張りの長には直通の電伝虫が渡されているらしい）、〝白ひげ海

賊団〟がこの島に戻って来る事になったのはまだ想定内だったのだが…。

（あたしの事を覚えている島民がいたのは計算外だったな…。）

以前、この島で補給した際に、〝白ひげ〟にケンカを売ろうとしたルーキーが暴れているのにたまたまかち合い、ぶちのめして海軍に引き渡した事があった。

1年程前の事になるが、その時の事を覚えていた島民がいたらしい。海賊を助けた事が海軍に知られるとマズい、という事は島民も充分に理解していた為、そこは心配していないが〝白ひげ海賊団〟への口止めはまず不可能だろう。というより、既に連絡が行っているようだった。

幸い、この島では名乗っていない為、〝英雄の孫〟である事を知っている者はいない。しかし、ターニャも〝新世界〟では名の知られた賞金稼ぎである為、外見的特徴などから素性が知られる可能性は充分にある。

既に嵐は過ぎ去り、空は晴れている。明るくなってきた為、直に夜が明けるだろう。

〝白ひげ海賊団〟にサッチを保護した賞金稼ぎの情報がもたらされたのが3時間程前。そして治療が終わったのはつい10分前。

ちゃんと助かったのを見届けた以上、これ以上この島に用は無い。〝白ひげ海賊団〟が島に戻ってくるまでにさっさとこの島を出るべきだった。恐らく早ければ後1～2時間程で戻ってくるだろう。ぐずぐずしていれば、かち合う可能性が高い。面倒臭い事

になるのはゴメンだった。
（…さっさと行こう。）
そうと決まれば長居は無用。
「じゃ、後はよろしく。行くよ、ドゥーイ。」
「ガウッ！」
サッチの容態が説明されたところで、話は終わり、とばかりにターニャがドゥーイを従え、立ち上がる。
「え?!あ、あんた一体どこに?」
突然の行動にぎょっとしている医者―頭頂部が涼しそうな髪型の中年男に構う事なく、「あ、これ治療費。」と治療中に用意していたベリー札を押し付ける。
「治療費って…。」
「〝白ひげ海賊団〟から出るんだろうけど、まぁ、真夜中に叩き起こした迷惑料って事で。」
〝億越え〟も狩りまくっている為、金に困っていないどころか、常に懐は潤っている。理由はどうあれ夜中に無理を言った事は事実なので、最初から治療費は置いていくつもりだった。
「ちょ、ちょっと…!!!」

目を白黒させている医者を尻目に、足早に診療所を出る。
「急ごう、ドゥーイ。お兄ちゃんとお祖父ちゃんが待ってるし。」
「ガウ。」
港に停めて置いた自身の船に飛び乗り、沖に漕ぎ出した時だった。
「！あれは…。」
前方から、かなりのスピードで近付いてくる影を見付ける。
（まさか…！）
「グルル…！」
ドゥーイも同様に気付き、警戒を始めた。
徐々に夜が明け、朝日がターニャを後ろから照らす。
向こうもターニャに気付いたらしく、距離が近付くにつれて減速する。足元を覆尽くすようにして噴射されていた炎が消え、５ｍ程の間隔を空けて完全に船が止まる。
「チビの虎を連れた若い女って事は…。お前がサッチを助けてくれた奴か?!」
水平線から姿を現し始めた太陽を背にしている為、そちら側からはターニャの顔が見えないのだろう。眩しそうに目を細めながら、愛用の小型船〝ストライカー〟で一足先にサッチの無事を確かめに来た〝火拳のエース〟が叫ぶ。
（何でこのタイミングで会うんだか…。）

軽く溜息を吐きながら、ターニャが無言で頷きを返した。
「！あいつは…？！」
「生きてるよ。間も無く目を覚ますって言ってたから、早く会いに行ってあげたら？」
「っ良かった……！！！」
サッチの生存を告げた途端、エースが気が抜けたように〝ストライカー〟に座り込んだ。
その様子を見て、ドゥーイも敵じゃない事を悟ったらしく、警戒を解いた。
そんなエースに構う事無く、ターニャがゆっくりと帆を張る。
ゆっくりと進み始めるターニャに気付いたエースが顔を上げ、声を張り上げた。
「！待てよ!!礼がしたい！もうすぐオヤジが来る！それまで待っててくれ…!!！」
「別にお礼が欲しくて助けた訳じゃないし…。急いでるから遠慮する。」
ターニャの船が〝ストライカー〟に近付き、横並びになろうとした瞬間、帆を調整する為のロープを思いっ切り引いた。
グンッ！と船が加速する。
「待てって!!」
〝ストライカー〟を抜き去る瞬間、ターニャがエースの顔を見詰め、告げた。
「じゃあね。いつか会う日が来るかもしれないけど…。」

「！お前、まさか……?!」

ゴオオッ……!!!

その瞬間、激しく吹いた追い風によって、一気にターニャの船が〝ストライカー〟を振り切った。

ザザザザザザ…!!!

（どうなるかな、これから…。）

サッチを助けた事がどんな影響を生むか。

しかし、どんな状況になろうとも…。

「ルフィの義兄弟(きょうだい)は死なせない…!!!」

「グルルル…?」

不思議そうに見上げてくるドゥーイに軽く微笑(ほほえ)みを返しながらも、ターニャの瞳には殺気さえ込められたような決意が宿っていた。

第８話　ちょっとの休息も必要です

　ターニャがサッチを助けてから3日後。ローとの電話から4日が経った朝、3日3晩船を走らせ続けたターニャは、一旦休息を取る為に近くの島に寄っていた。
　マリンフォードまでは後半分程。何事も無ければ2日もあればマリンフォードへ着くが、さすがに丸5日に渡って不眠不休での航海となるとリスクが高い。元々ローに伝えていた「早くて5日」という見積もりも、休憩を1日挟んでの計算である。
　〝グレイスリーナ島〟。新世界の中においては珍しく、誰の縄張りにもなっていない島だが、島自体に自衛団が存在する為、治安はそれ程悪くは無い。これまでにも何度もマリンフォードへの休憩地として滞在した事があり、そのうちの何度かは自衛団の手に負えなかった海賊を代わりに叩きのめした事もあった為、ターニャの事を知る島民も多く、特に自衛団の面々からは鍛えて欲しいと頼まれる事も少なくは無かった。
「おう、ターニャ。久しぶりだな。」
「また鍛えてくれよ。」
「今回はどのくらいいれるんだ?」
　港に船を着けるなり、厳(いか)つい顔の男たちに笑顔で出迎えられる。

「…いくら何でも、耳が早くない？」
「ガルル。」
今まさに到着したばかりなのに、何故出迎えがあるのかと尋ねるターニャの横で、ドゥーイもまた首を傾げた。動きの揃った1人の1匹の姿に笑いを噛み殺しつつ、その中の1人が疑問に答えてやる。
「そりゃあ、お前。この〝新世界〟をそんな小さな船、それも1人で来るなんてお前か〝大剣豪〟位だろうよ。」
「おうよ。遠目から見ても分かるぜ。お前の船が見えたらすぐに自衛団（おれたち）に連絡をくれるように島のヤツらにも頼んでるのさ。」
「賞金稼ぎはまぁまぁ来るが、威張（いば）り散らしもせずに鍛えてくれるのなんてお前くらいだしな。」
「……なるほど。」
「ガゥ…。」
そんなやり取りをしながらも、顔はアレでも気は良い男たちはターニャからロープを受け取り、船が流されないようにしっかりと固定してくれた。
「マーサがお前の好きな煮付けを仕込み始めたから、夕方に店に来いって言ってたぞ。ちょうどその頃に食べ頃だとよ。」

「マーサが？」

「おう。お前好きだろ？マーサの作った〝キンモクダイ〟の煮付け。」

桟橋（さんばし）に降り立ったターニャに、１人の男が告げる。

島で唯一の食堂（酒場を兼任した所なら何件かあるが）の主人・マーサは恰幅（かっぷく）の良い女性で、１０年程前に夫と息子を海賊によって殺され、１人で食堂を切り盛りしている。そして自身も１年程前に海賊に襲われ、殺されかかった所をターニャに救われた事があり、以来ターニャを娘のように可愛がってくれていた。

肉類よりも魚や野菜を好むターニャだったが、特にマーサの作る魚の煮付けは好んで食べており、その中でもこの付近の海域で良く獲（と）れる〝キンモクダイ〟の煮付けは好物の１つである。

甘辛く煮付けた、口の中でほろりと解けるような口当たり。あの味はなかなか出せるものではない。ターニャも何度かマーサに教えられながら挑戦したものの、微妙な火加減や加熱時間が出来上がりに大きく差を付け、１度も成功した事は無い。あの味はマーサにしか出せないのだ。

しかし、〝キンモクダイ〟自体が年中獲（と）れるものでは無く、産卵場所を求めて移動してくるこの季節にしかこの海域には来ない上に、マーサは自身のお眼鏡に適ったもの以外は決して仕入れ無い為、この島に寄っても食べられない時もある。今回はラッキーと

言えた。
「やった、ラッキー！」
「ドゥーイ、お前にもマーサが肉を用意してくれたらしいぞ。もらってきたらどうだ？」
「ガル？」
嬉しそうに笑うターニャを微笑まし気に見ていた1人が、思い出したようにターニャの足元にいたドゥーイを見下ろしつつ教えてやる。
「行って来て良いよ、ドゥーイ。」
どうしようか、と迷っているようにも見えるドゥーイに声をかけつつ、ターニャが続ける。
「あたしは一眠りしてから行くから、マーサによろしくね。」
「いや、鍛えてくれよ。」
現在は昼前。夕方まで取り敢えず宿を取ってシャワー浴びて寝る、と呟いたターニャに自衛団の1人が突っ込む。
「丸4日徹夜してるんだ。ちょっと休ませてよ。」
欠伸を噛み殺しながら主張するターニャに、突っ込んだ男が引き下がる。
「なら一眠りした後で良いから夕飯前に頼む。1時間くらいで良いからよ。」
「じゃ、夕方の5時位でどう？」

「おう。それで良いぜ。」
「悪いな、ターニャ。」
　気心の知った仲であるが故に、口調も気安く、また自衛団の男たちも気にした様子は全く無い。
　――――――その後、ドゥーイを見送った後で馴染みの宿でシャワーを浴びて小ざっぱりとしたターニャは、清潔なシーツにくるまれて４日ぶりの安眠を満喫した。しかし、いつもの如く寝過ごしそうになり、匂いを辿ってターニャを探しに来たドゥーイに起こされる事となる。
　時刻は夕方の６時を過ぎたあたり、そろそろ町に明かりが灯り、周囲が薄暗くなって来る頃。
　町外れの集会所に、男たちの気合いの入った声と少女の怒号が響いていた。
「ドンキー、振りが大き過ぎる！ジェイス、足元がお留守！」
「げふっ……！」
「うわっ?!」
　指摘と同時に浅黒い肌の大柄の男―ドンキーの木刀を躱して肘鉄を鳩尾に叩き込み、男たちの中で最も若く小柄な青年―ジェイスに足払いをかけて見事に転ばせる。
「さて、じゃあ今日はここまで！」

全員の組手を一通り終え、パン！と手を1つ叩いて宣言したターニャに、一気に場の空気が和んだ。
「あ～…。きつかった……。」
「相ッ変わらずいざとなると容赦ねェな…。」
「体中がバキバキだぜ……。」
終了の合図と共に荒い息を吐いてその場に座り込む者、
「ありがとよ、ターニャ。お蔭で改善点が分かったぜ。」
「訓練メニューを改めて見直した方が良さそうだ。」
すぐに次の鍛錬へと意識を移す者と様々だったが、全員に共通していたのは自身の実力が引き上げられている事への充足感だった。
「取り敢えず反省会は後にしようよ。お腹空いちゃったし。」
「ガゥ。」
話が止まらなそうな男たちにターニャが訴え、その腕に抱かれたドゥーイも同意するように1言吠えた。
「そうだな。マーサもお前を待ってるだろうし、続きはマーサの店でやるか。」
その後、自衛団の男たち10人と連れ立ってマーサの食堂へと足を運んだターニャは、マーサお手製の〝キンモクダイ〟の煮付けに舌鼓を打っていた。

「あ～、おいしい。この味、この味～。」
「嬉しい事言ってくれるねェ。たんとお食べ。」
　口いっぱいに頬張りながら嬉しそうに頬を緩めるターニャに、恰幅の良い体を色褪せてはいるが清潔なエプロンに包んだ、食堂の女主人―マーサも頬を緩める。
　その様子を自衛団の男たちも微笑ましそうな顔でその様子を眺めていた。
　彼らもまた煮付けを味わいつつ、鍛錬での疲れを癒すべくそれぞれ好みの酒を引っかけていた。
「しっかし、おれたちも強くなったと思わねェか？なぁ、ターニャ。」
「最初に比べたら格段にね。」
　さっきターニャに転ばされたばかりの青年―ジェイスが、早くも酔いが回ったのか上機嫌に切り出す。それに大きく頷いたターニャだったが、肩を竦めながら続けた。
「ルーキー相手ならもう引けを取らないだろうけど、油断は禁物だよ？別に無理に倒したりする必要は無いんだから。戦えない人たちが避難出来るまで時間を稼いで、その間に殺されないで逃げ切れればもう充分。」
「そうは言っても、おれたちにだって生活がある。おまけにこの島の周辺は波が穏やかな割に、海軍の支部が近くにある訳でもねェからな…。島を捨てる事なく退治出来るなら、それに越した事はねェ。」

ターニャの言葉に渋面を作ったのは、自衛団のリーダーであるマーカスだった。
「気持ちは分からないでも無いけど、命をあっての物種って言うでしょ？あたしがみんなを鍛える事を引き受けたのは別に海賊と戦わせる為じゃない。生き残ってもらう為なんだから。」
強くなった事で自信が付いたのは喜ばしいが、慢心は危険である。
「ターニャの言う通りだよ。生きてさえいりゃ、何度だってやり直しが利くもんさ。」
マーサにまで窘められた彼らは、その後は折れたようにも見えた。
――――――――――しかし、ターニャが、彼らにもっときつく言っておくべきだったと後悔したのは、それから少し後の事。マリンフォードの祖父の家でニュース・クーから受け取ったばかりの新聞を受け取った後の事だった。

第９話　怒りで眩暈を覚えました

――――――――それを知ったのは、〝グレイスリーナ島〟を発って３日後、マリンフォードに辿り着いた翌日の事だった。

祖父や義兄と無事に再会した事で、ドフラミンゴの一報を聞いてからそれまでどこか張り詰めていた気が完全に緩んだのか、普段よりも格段に眠りが深かった為か、その朝は珍しくドゥーイに起こされる事無く、自然と目が覚めていた。

時刻は午前５時４０分。普段より多少早いが、寝直すのも微妙な時間帯なので起きてしまう事にした。

ターニャがマリンフォードで寝泊まりしているのは、祖父がマリンフォードに建てた家の１室。海が一望出来る大きな窓を開け放ち、潮を含んだ風を浴びる。既に外は明るくなり、後１０数分もすれば太陽が昇るだろう。

「ふぁ……。」

欠伸と共に大きく伸びをし、ターニャがベッドから下りる。

「ガゥ……？」

軽くベッドが軋み、その音と揺れで枕元で丸くなっていたドゥーイが寝惚け眼でター

ニャに目をやる。
「ゴメンゴメン、まだ寝てて良いよ。」
「グルル……。」
背中をゆっくりと撫でてやるうちに、ドゥーイは再び眠り始める。
ふふっとそれに微笑み、今度こそドゥーイを起こさないように出来るだけ音を立てずに身支度を整えたターニャは、祖父が起きる前に朝食の支度を済ませておくべく、階下へと下りていった。
トントントン…！
静かなキッチンに、包丁の音が小気味良く響く。事前に火にかけておいた鍋が沸騰したのを確認し、じゃがいもに完全に火が通った事を確認する。それから1口大に切ったキャベツとベーコン、賽の目状に切ったトマトを入れ、顆粒のコンソメを適量振り入れた。軽くかき混ぜた後で火を弱火にし、蓋をする。沸騰させないように10分程煮込めばスープの完成である。
その間にサラダも作ってしまおうと、酒蒸しした後で粗熱を取っていた鶏肉を手で細く裂いていく。
「熱ちちち……！」
まだ少し熱いが、完全に冷めてしまうと綺麗に裂けない為、これは我慢するしかない。

あまり太くしてしまうとサラダの中で存在を主張し過ぎて鶏肉が主体となってしまうので、面倒だが出来る限り細くする。包丁で切ってしまうと形が崩れ易い上に味も抜けてしまう為、手で行う必要があった。

鶏肉を全て裂き終え、手を洗ってから鍋の蓋を開けてスープの味を見る。

「こんなものかな…。」

時刻は6時２０分を過ぎたあたり。間も無く祖父も起きてくるだろうから、それまでには食べ頃に冷めるだろうと再び蓋をした。

手早くレタスときゅうり、トマトを洗ってサラダボウルを用意し、レタスを手で千切ってボウルに入れていく。きゅうりを斜めに薄切りし、トマトはくし形に切ってからヘタを切り落とす。ボウルの中にきゅうりとトマト、さっき裂いた蒸した鶏肉を見栄え良く盛り付ければサラダの完成である。

それから小さいボウルに醤油と砂糖、みりん、黒酢、オリーブオイル、白ごまを適量入れてスプーンでかき混ぜ、ドレッシングを作った。

野菜嫌いの祖父の為に、何とか野菜を食べさせようと色々試行錯誤していたターニャだったが、長年の経験で学んだのは肉類と一緒ならば進みが良いという事だった。特にターニャお手製のドレッシングをかけた蒸した鶏肉のサラダは、食べごたえがあると祖父も好んでいる。

祖父は兄同様に肉類を好み、野菜を自分から食べようとしない為、放っておくと食事も肉オンリーとなる。若い頃ならばそれでも良かったのだろうが、祖父も既に良い年であり、出来る限りヘルシーな食生活を送って欲しい、とターニャは考えていた（実際に義兄のローからも、高血圧気味の為ある程度節制させろとのお達しを受けている）。

ターニャ本人が好むのは肉よりも魚だが、祖父と一緒に食事をする時には祖父に合わせて必然的に肉類が多くなる。

やれやれ、とターニャが軽く溜息を吐いた直後、チーン！と軽快な音が響く。

「ジャストタイミング。」

オーブンを開くと、香ばしい匂いをさせたバターロールが綺麗に焼きあがっている。それをバスケットに1つずつ移し、出来上がったサラダやドレッシングと一緒にダイニングテーブルへと置いた。

因みに、この家にはガスレンジとガスオーブンが完備されている。Ｄｒ．ベガパンクの発明の1つで、マリンフォードの住人や一部の上流階級の人間はその恩恵に預かっていた。

閑話休題

さて、後は祖父が起きてからオムレツでも焼こうかと冷蔵庫から卵と牛乳を取り出した時だった。

「おお、今日も良い匂いじゃな。」
　まだネクタイやジャケットを身に付けていない為、普段よりラフに見えるが身支度を整えた祖父が、新聞を片手にキッチンへと入ってくる。
「おはよう、お祖父ちゃん。」
「おお、おはよう。」
　孫娘に挨拶を返したガープは、ダイニングテーブルの自身の指定席に座るなりガサリと新聞を広げた。
「コーヒーと紅茶と緑茶、どれにする？」
「今日はコーヒーにしようかの。」
「分かった。ちょっと待っててね。」
　今朝挽いておいた豆を使ってコーヒーを２人分用意する。
「何か面白い記事でもあった？」
「いや、今日も海賊共の記事がほとんどじゃわい。」
　コポコポとフィルターにお湯を注ぎ入れながら尋ねるターニャに、苦々しい表情で返しつつ、ガープは新聞を捲る。
「いくら減らしても次々ルーキーたちが出て来るしね～。」
　ガープにコーヒーを差し出しつつ、ターニャももう１つのカップを自身の席に置く。

「オムレツで良いよね？」
「おお。」
　コーヒーが冷めないうちに、とボウルに卵を割り入れてほんの少し牛乳を入れてかき混ぜる。熱したフライパンにバターを溶かし、溶いた卵を流し入れた。慣れたもので、すぐにオムレツを2つ終えるとスープをよそってガープの前へ置く。
「お祖父ちゃん、新聞は朝ご飯の後にしてよ。冷めちゃう。」
「分かった分かった。」
　傍若無人（ぼうじゃくぶじん）にも思えるガープだが、目に入れても痛く無い程に溺愛（できあい）している孫娘（ターニャ）には弱い。これがルフィなら、男である為か可愛がり方が些（いささ）か雑になるのだが。
　孫娘（ターニャ）の心尽くしの朝食が冷める事も本意では無い為、ガープも大人しく新聞をテーブルに置く。
「おお！今日もうまそうじゃの!!」
「どうぞ、召し上がれ。」
「うむ。」
　いただきます！と勢い良く手を合わせたガープにサラダと取り分けてやりながら、ターニャが何の気無しにガープが置いた新聞に目を向けた。
「えっ……!?」

ガタン！

それを目にしたターニャの手から、サラダを取り分けていたガラスの小鉢が滑り落ち、テーブルに落下する。

「どうしたんじゃ、ターニャ？」

珍しい失敗に、ガープがオムレツを頬張ったまま驚いたようにターニャに目をやる。

「これ…、この記事……。」

わずかに震える手で新聞を掴み、一面の記事を広げるターニャにガープもまた表情を引き締める。

〝グレイスリーナ島壊滅!!ルーキーの仕業か?!〟

そんな見出しと共に記された記事は、ターニャを絶望に叩き落すには充分だった。

【新世界の中でも穏やかな海域に囲まれた静かな島〝グレイスリーナ島〟。人口７００人程の小さな島であり、目立った観光名所は無いが、穏やかな気候と綺麗な湧き水に恵まれた事で酒造りが盛んであり、知る人ぞ知る島である。

しかし、もうその銘酒は幻となった。２日前の未明、何者かによって島が襲撃を受け、緊急信号を受信した海軍の巡回船が到着した際には、既に島の大半の人間が事切れていた。生き残った人間はわずか１０数人であり、生き残った者の中から「〝黒ひげ〟を名乗る海賊に襲われた」との証言が聞かれているものの、詳細は未だ不明。海軍が引き続

きの調査を……。」

そこまで読んだところで、ターニャの感情が爆発する。

「〝黒ひげ〟エ……!!!」

ズゥンッ!!!!

ターニャの叫びと同時に、その身から〝覇王色〟の覇気が溢れ出す。

「うおっ?!」

いきなりの覇気に、ガープでさえ一瞬気圧される。そして、怒りによって極限にまで引き上げられたその覇気が半径1km圏内にまで影響しているのを感じ、焦る。

〝見聞色〟を発動させれば、その影響範囲内の人間がバタバタと倒れていくのが分かる。

「落ち着かんかターニャ!!!」

ズオッ!!!

一喝(いっかつ)するのと同時に自身も〝覇王色〟の覇気をターニャに向けて放つ。

「っ!!?」

叱責するかのように向けられたガープの覇気に、ビクン!と反応したターニャはそれをきっかけに我に返った。

「あ…。」

「落ち着かんか、今ここでお前が怒ってももう遅いんじゃぞ。」
「ゴメン、お祖父ちゃん…。」
ガープの厳しい言葉に、ターニャが悄然として床に座り込む。
「ガウ!!!」
そこに、主人の怒りに満ちた覇気を感じ取ったドゥーイがキッチンに駆け込んで来た。
「グルル…?」
肩を落としたターニャに駆け寄ったドゥーイが心配そうに擦り寄る。それを抱き締めながら、ターニャは怒りと悲しみに揺れる心を何とか落ち着けようとしていた。
プルプルプルプル…!
そこに、隣のリビングから電伝虫の声が鳴り響く。
プルプルプルプル…!
ガチャッ……!
『ガープ!!!一体何があった?!!今のはターニャの覇気だろう?!』
「センゴクか。」
泡を食った様子で連絡をしてきたのは海軍の現元帥―センゴク。彼の家はここから５００ｍ程しか離れていない為、当然先程のターニャの覇気も感じたのだろう。

「すまんが後でかけ直す。」

ターニャがこの状態では彼女にも聞こえる距離で事情を説明するのも酷だろう、とガープはセンゴクの返答を待たずに電伝虫を切った。

まずは孫娘(ターニャ)を落ち着けるのが先だと、海軍本部中将ではなく1人の祖父として判断したのだ。

第１０話　それぞれの怒り

――――――――――――――ターニャが怒りを露わにしていたのと同じ頃。

―〝新世界〟のとある海域―モビーディック号―

「オヤジ！オヤジ！」

バンッ！

泡を食った様子で船長室に駆け込んできた〝息子〟の姿に、船長―エドワード・ニューゲートは酒を呷っていた手を止めた。周りにいたナースたちも、点滴を打とうとしていた手やカルテを書き込んでいた手を止めて何事かと声の方を振り返る。

「どうしたってんだ、一体。」

「これ！これを見てくれ!!」

バサリと広げられたのは、今朝ニュース・クーによって届けられたばかりの新聞。その一面に記されていたのは、見覚えのある島の名前。

「〝グレイスリーナ島〟が壊滅だと……？」

その島は、銘酒が多く作り出される事で〝白ひげ海賊団〟もたびたび寄港していた、馴染みの島だった。職人気質の人間も多く、〝四皇〟相手でも怯える事も謙る事も媚び

る事も無い、縄張り以外では珍しい程に居心地の良い島だったのだが…。

〝壊滅〟。険しい顔で新聞を見詰める白ひげに、〝息子〟が続ける。

「それだけじゃねェ！これ、ここを見てくれ…！」

その指が示していた1文。

「〝黒ひげ〟って事ァ……。」

〝黒ひげ〟。その2つ名には覚えがあった。

「間違いねェ！ティーチの奴だ……!!」

5日程前にこの海賊団においての最大のタブー〝仲間殺し〟を行いかけ、船を出奔した裏切り者である。

裏切り者―マーシャル・D・ティーチ。〝黒ひげ〟とは正式に世界政府によって付けられた2つ名では無い。まだ〝黒ひげ〟が仲間だった頃、否仲間だと思っていた頃に「オヤジが〝白ひげ〟なら、おれは〝黒ひげ〟だ」と宴の席で戯れに話していた名だった。

その〝黒ひげ〟が、〝白ひげ海賊団〟の懇意にしていた島を襲った。直接の縄張りへの攻撃では無いが、これは〝白ひげ海賊団〟への挑発、宣戦布告ともとれる。

現在、〝白ひげ海賊団〟内ではティーチがしでかした今回の事件を明確な裏切り行為と断じる者と、サッチが助かった事もありこのまま〝追放〟という形で恩情を訴える者

で真っ二つに割れていた。
白ひげ自身、ティーチがサッチから奪い去った〝悪魔の実〟の事もあり、今回の事は〝追放〟処分のみで終わらせようとしていたのだ。
しかし、
「堅気に手ェ出しやがって、あのアホンダラがァ……!!!」
海賊同士の交戦ならばいざ知らず、何の罪も無い一般人への虐殺行為など流石に見過ごす訳にはいかなかった。
怒りの言葉と共にビリビリと放たれる覇気に、傍らの〝息子〟とナースたちが思わず息を呑む。
直接自分たちに向けられたものでは無い為、非戦闘員であるナースたちも立っていられるものの。老いても尚凄まじいその覇気は船長室のみならず、モビーディック号全体に伝わった。
コンコンコンッ…!
「オヤジ、入るよい。」
ノックをしたものの、返事を待たずに入室したのは、一番隊隊長―マルコ。敬愛する〝オヤジ〟の覇気に当然気付いたものの、周囲数ｋｍに渡って船影は無く、特に船内に異常も無かった為、隊長たちを代表して彼が来たのである。

「マルコか…。」
「一体、どうしたんだよい？若ェ者がすっかりビビっちまったよい。」
気遣わし気に尋ねてくるマルコに、白ひげが新聞を放る。
「今日の新聞…？」
「その様子じゃァ、まだ知らねェようだな…。ティーチの馬鹿がやりやがった…!!!」
「！」
その言葉に、マルコがバサバサと新聞を広げる。
「！これか…！〝グレイスリーナ島〟が壊滅…？！」
「堅気に手ェ出すたァ許しちゃおけねェ…！サッチの件もある。マルコ！〝息子〟たち全員に伝えろ。〝黒ひげ〟を探し出せ！おれがケジメを付ける!!!!」
「ああ、分かったよい…！」
〝息子〟たち全員。その言葉が指し示すのは、〝白ひげ海賊団〟とその傘下全て。
〝四皇〟を敵に回せば、〝新世界〟に逃げ場は無い。
固唾を呑んでそれを見守っていたナースたちも、事態は既に収束したも同然とどこか安堵にも似た思いを抱いていたが、それは数日後に裏切られる事となる。
━〝マリンフォード〟海軍本部━
白ひげが傘下たちをも加えて〝黒ひげ〟の捜索に全力で打って出た頃。

ターニャは一先ず落ち着きを取り戻し、相棒であるドゥーイさえ置いて、朝食にも手を付けず知己の仲であるドンキホーテ・ロシナンテの元を訪ねていた。

ロシナンテ少将（１度は三等兵からのやり直しとなったロシナンテだったが、１１年の間にこれまでの経験を活かし出世した）は〝前半の海〟と〝新世界〟を含めた海賊たちの情報を収集及び管理する、諜報部隊のトップであり、〝四皇〟といった大海賊は勿論、所謂〝ルーキー〟たちの情報も１度はここに集められる。

因みに、手配書の発行や懸賞金の増減も統括しているのも全てロシナンテである。

閑話休題

この諜報部隊には、〝新世界〟や前半の海のみならず〝東の海〟、〝西の海〟、〝北の海〟、〝南の海〟、全ての海の海賊たちの情報が入る。〝黒ひげ〟の情報も当然入っている筈だった。

勝手知ったる海軍本部。幼い頃から幾度と無くここに出入りしているターニャは最早顔パスである。しかし、普段のターニャならば余程急ぎの用でも無い限り、本部内まで足を踏み入れる事は少ない。

〝海軍の英雄〟である祖父の身内としての特権を最大限利用していた幼い頃ならばいざ知らず、既に賞金稼ぎとして独立している身では流石にそうホイホイと入り込んでは機密保持の問題も出て来る。

それを理解しているからこそ、祖父が孫可愛さに許可を出しても固辞してきたのだ。
しかし、現在のターニャにそんな事に気を使っている余裕は無い。
コツコツと鬼気迫る様子で廊下を足早に歩くターニャの姿に、彼女を幼い頃から知る海兵たちは目を丸くし、彼女を知らない若い海兵たちはぎょっとしたように目を向けてくるのが分かるが、ターニャはそれに目もくれない。
コンコンコン…!
ガチャッ…!
とある扉の前で立ち止まり、ノックするも返事を待たずにそれを開く。
「おい! 勝手に入るな…って、ターニャか?」
扉の開く音に振り返り、怒鳴り付けようとしたロシナンテが、そこにいたターニャの姿に目を丸くする。幼い頃ならばともかく、幼少期から良く知るこの少女が最近では本部内に足を踏み入れないように気を使っているのを良く知っていた為だ。
早朝である為、執務室にはまだロシナンテしかいない。後30分もすれば部下たちが出勤してくるだろうが、諜報部隊という性質上、部外者が入り込むのは好ましく無い。ロシナンテしかいないのは幸いだった。だからこそターニャもこの時間に尋ねて来たのだろうが、この少女がこんな強硬手段に出る事など滅多に無いのだ。
「ロシーさん、お願いがあるんだけど。」

怪訝そうなロシナンテに構う事なく、挨拶すら省いて単刀直入に切り出したターニャに、ロシナンテが呆気に取られる。
「へ?!あ、あぁ…。何だ?」
「海賊〝黒ひげ〟の情報をありったけ教えて。」
机で何やら書類を片付けていたらしいロシナンテにつかつかと歩み寄り、ターニャがロシナンテに迫る。
「〝黒ひげ〟?」
「ここなら、全ての海の海賊の情報が揃ってるでしょ?早く。」
ズイッとさらに迫るターニャの目は完全に据わっている。
訳が全く分からないものの、今彼女に逆らってはいけない、というある種の生存本能のみでロシナンテは先程報告されたばかりの〝黒ひげ〟の動向について纏めた書類をターニャに差し出した。
「ありがと。」
受け取った書類に目を通すターニャだったが、徐々にその表情は険しくなっていく。
「〝グレイスリーナ島〟が襲撃されて丸2日経ったが、その後の足取りはほとんど掴めてねェ。辛うじて、生き残った島民の証言から〝アカガレ島〟の方向に向かったらしい、という事は分かったが…。」

「〝アカガレ島〟、ね…。」

〝グレイスリーナ島〟から船で半日程度の〝アカガレ島〟は商人の島である。世界政府から公認された数多くの商船が〝前半の海（パラダイス）〟とシャボンディ諸島、そして〝新世界〟を行き来している。

これで〝黒ひげ〟の目的の目星が付いた。

〝アカガレ島〟にはコーティング職人がいる。そこから海底を進んで〝前半の海（パラダイス）〟へと逃れるつもりなのだろう。〝新世界〟は言わば〝四皇（よんこう）〟のお膝元。その包囲網から逃げ続ける事は難しい。

しかし、〝前半の海（パラダイス）〟ならばその威光も完全には届かない。言わば、どこにも所属していない海賊にとってはまさに〝楽園（パラダイス）〟。だからこそ、〝原作〟の〝黒ひげ〟も〝前半の海（パラダイス）〟へと逃れたのだろう。

〝アカガレ島〟からシャボンディ諸島は約2日。〝グレイスリーナ島〟の襲撃から既に2日経っている為、〝黒ひげ〟も既にシャボンディ諸島に着いていてもおかしくは無い。マリンフォードからターニャの船でおよそ1時間弱。今から急いで出立すればギリギリ間に合う可能性もある。

ターニャが書類から顔を上げた時だった。

コンコン…。

再び扉がノックされる。
「入って良いぞ。」
ガチャッ…！
ロシナンテの入室許可と同時に扉が開き、そこから滑り込むように入ってきたのは
「お兄ちゃん…。」
「ローか。」
ターニャの義兄、海軍本部准将のトラファルガー・ローだった。
「やっぱりここにいたか、ターニャ。…〝黒ひげ〟を追う気だな？」
チラッと、ターニャの持つ書類に目を走らせたローが溜息混じりにターニャに問う。
「…何で知ってるの？」
「ガープの爺さんから粗方の事情は聞いた。お前ならまずは情報を集める為にここに来るだろうと思ったからな…。止めても無駄だろうから、突っ走る前に釘だけ刺しに来たんだよ。」
「釘？」
「…まァ、お前よりも先に刺さなきゃいけねェ人がここにいるみてェだがな…。」
ジトッとした目で見てくるローに、ロシナンテが気まず気に目を逸らす。
「コラさん。あんた、諜報部隊のトップだろ？民間人にホイホイ機密情報見せてんじゃ

ねェよ。」
「うっ…。悪イ、つい…。」
「あたしが見せてって言ったの。センゴクのおじさんには内緒にしてて…。」
しょんぼりするロシナンテに、若干頭の冷えたターニャが申し訳無さそうにローに弁解する。
「…今回は見逃してやるが、次があったらきっちり報告してやるからな。ターニャ、お前もだ。提供出来る情報は提供してやる。あんまり本部内をうろつくな。」
「…ごめんなさい。」
流石に今回は全面的にターニャが悪い。素直に謝る。
その姿を見て、ローも今回はそれで良しとしたらしい。溜息を1つ吐いた後にターニャの頭をぐしゃぐしゃとかき撫でた。
「〝黒ひげ〟を追うなとは言わねェ。だが、冷静になれ。憎しみに身を任せるな。…碌な事にならねェぞ。」
「…うん。」
「行くならちゃんとメシを食ってからにしろ。…ガープの爺さんも心配してた。」
「うん。」
いつも通り、とまではいかないが微かに笑みを浮かべたターニャに、ローもほっとし

たように微かに頬を緩ませる。
「なら行くぞ。」
「どこに？」
そう言って踵（きびす）を返すローにターニャが尋ねる。
「朝飯だ。…たまには兄妹（きょうだい）水入らずってのも悪くねェだろ？」
チラリと首だけ振り返り、ニヤリと笑みを浮かべる義兄（ロー）に、ターニャも今度こそ笑顔で頷いた。

第11話　〝姫夜叉〟

――2時間後、ターニャは相棒のドゥーイと共にシャボンディ諸島へと上陸していた。

その中でも、〝黒ひげ〟がいる可能性が最も高いエリア、20番GR(グローブ)付近に船を着け、見聞色(けんぶんしょく)の覇気を駆使する。

（〝アカガレ島〟から〝前半の海(パラダイス)〟に入ったなら、20番台のGR(グローブ)にいる筈…。）

〝新世界〟からシャボンディ諸島に入るルートは、大きく分けて3つある。

1つ目は、聖地〝マリージョア〟からの通行許可を得て船を乗り捨て、新しい船へ積み荷ごと移動する方法。世界政府加盟国の王族や貴族、世界政府に公認された商人たちはこの方法を使う。

2つ目は、〝マリージョア〟の真下に位置する海底国家〝魚人島〟を経由する方法。主に海賊や、世界政府非加盟国の者たちが利用する方法である。

一般的に知られているのはこの2つだが、実は〝抜け道〟が存在している。

3つ目のルートは、〝魚人島〟を経由しない海底ルート。〝赤い土の大陸(レッドライン)〟には、海底火山の爆発や数100年の間に少しずつ繰り返された地殻変動によって、数10ヶ所

の亀裂が存在している。

そのほとんどは深いものでも数１００ｍの浅い亀裂だが、その中で４ヶ所、元々あった亀裂を人工的に広げて〝トンネル〟として開通されたものが存在する。

〝魚人島〟を示す記録とは離れている為、その存在を知る者でなければ見付ける事は出来ないが、主に裏社会の人間が使用しているものだ。ターニャがその存在を知っているのは、かつて成り行きでマフィアの幹部を海賊から助けた事があり、その礼にと教えられたからである。

当然、〝新世界〟に君臨する〝四皇〟ならばその存在を知っている筈だ。元々、自然に出来た亀裂を利用したものなのでそれ程大きいものでは無く、大きいものでもガレオン船が１隻ギリギリで通れる位な上に潮の流れが速い難所な為、大所帯である〝四皇〟はそうそう使わないルートではあるが。

その中でシャボンディ諸島に最も近いのは、〝アカガレ島〟を経由するルート。〝アカガレ島〟は〝新世界〟と〝前半の海〟を繋ぐ貿易の拠点であり、コーティング文化も発展している。〝魚人島〟との取引も重要視しており、海底ルートを行き来する為にシャボンディ諸島から植樹した〝ヤルキマン・マングローブ〟が数本根付いている為だ。

ターニャ自身、〝新世界〟と〝前半の海〟を行き来する場合はこのルートを使う事が

多い。〝魚人島〟は〝白ひげ〟の縄張りになる以前は、人攫い屋や海賊などの人間から蹂躙(じゅうりん)され続けていた為、今尚人間に対する憎しみと恨み、恐怖が根付いている。例外は〝白ひげ海賊団〟の人間位と言っても良い。

中には既にそれらを過去の事として処理し、入島する人間たち相手に商売を行っている者たちもいるが、そんな針の筵(むしろ)状態で過ごしたくは無い。

既に〝白ひげ海賊団〟を出奔(しゅっぽん)した〝黒ひげ〟も、〝魚人島〟を経由するとは考え難い。〝四皇(よんこう)〟の配下にいたのならば、〝黒ひげ〟も当然そのルートを知っているだろう。

間違い無く裏のルートを通って来る筈だった。

「やっぱり出遅れたかな…。」

既に別の島に移動してしまった後かもしれない。

海軍の駐屯所(ちゅうとんじょ)で、知り合いの海兵にそれらしい海賊が目撃されていないかを尋ねた方が良いかもしれない。

ターニャがドゥーイに行き先の変更を伝えようとした時だった。

「グルルル…!」

不意にドゥーイが何かを感じ取り、威嚇する。

ドゥーイの見聞色(けんぶんしょく)は、野生を生き抜いてきただけあってターニャより数段上である。

そのドゥーイが反応するという事は、少なくとも主であるターニャかあるいは彼自身に向けられた害意を感じたという事。

ターニャ自身も警戒を引き上げた直後、見聞色によってその存在を感じ取り、鬼徹を抜き放った。

ドンッ！

ドドドンッ!!!

キキキキンッ!!!!

銃声と共に放たれた銃弾を全て斬り落とす。

「その太刀捌き、夢にまで見たぜェ……!!」

直後に響いた濁声に、ターニャが視線を声の方向へと向ける。

「〝姫夜叉〟ターニャ…！この日を待ってたぜ…!!テメェとまた会える日をよォ……!!!」

「…悪いけど、覚えがあり過ぎて思い当たらないんだけど、あんた誰？」

肩まで伸びたざんばら髪に頬骨の浮いた青白い顔、目だけがギラギラと異様に光る痩せた男が、硝煙の立ち昇る銃をターニャへと向けていた。

「っこのオレを…！忘れやがっただとォ……?!」

怒りか屈辱か、声を震わせる男にターニャが冷たく言い放つ。

「少なくとも億越えか、それに準ずる実力者だったら覚えてる筈だけど…。全く記憶に無いって事はその程度って事でしょ？」

「ガウッ！」

賞金稼ぎとして独立しておよそ2年、ターニャが壊滅させた海賊団は１００近い。捕えた、もしくは手にかけた海賊は１０００人を下らない。よほど名を上げた者ならばともかく、有象無象のルーキーなどいちいち覚えていなかった。ドゥーイもまた、ターニャに同調するように吠える。

「〝ユード海賊団〟船長、〝硝煙のユード〟様を忘れただとォ?!」

そう叫ぶなり銃を連射する男―本人の証言では〝硝煙のユード〟に、弾丸を全て斬り落としていたターニャの記憶が刺激される。

「ああ、思い出した…。自分の部下盾にして部下ごとあたしを撃とうとした挙句、嵐の海に身投げした海賊…。生きてたんだ？」

およそ2年前、ターニャが賞金稼ぎとして独立したばかりの頃、〝前半の海〟のとある島で島民たちを奴隷のように扱っていた海賊団の船長だった。当時１５歳だったターニャによってほぼ壊滅状態となり、進退窮まって部下を盾にして身を守り、その体ごとターニャを撃とうとした狂気の男。

その後でユード本人は嵐の海に身を投げて消息不明となっていたが、ユードに撃たれ

た部下は肺を撃ち抜かれており、既に手の施しようが無かった。苦しむ男に嘆願され、最期はターニャが止めを刺したのだ。

　後味の悪い殺しを思い出し、ターニャが渋面（じゅうめん）となる。

「テメェのせいでオレは死にかけたんだ…！　無人島に流れついて、そこを出るのに1年以上もかかっちまった……!!　テメェに復讐する事だけ考えて生きてきたっ……!!」

「…完全な逆恨みでそこまで人を憎めるってのも、一種の才能かもね。」

「グルル…。」

　ターニャだけでなく、ドゥーイでさえ呆れたような声を上げる。

「悪いけど、今忙しいんだ。復讐なら、またの機会にしてもらうよ。」

　ザシュウッ……!!

　その言葉に、〝硝煙（しょうえん）のユード〟が激昂（げっこう）しかけた瞬間、瞬時に距離を詰めたターニャが男の両腕の腱を斬り裂いていた。

「ツギャアアアアアアア――――ッ!!!!」

　拳銃を取り落とし、ユードが痛みに絶叫する。

「……まぁ、その〝機会〟があればの話だけどね。」

　ドッ…！

　鳩尾（みぞおち）に拳を叩き込み、ユードの意識を一瞬で刈り取りながらターニャが続ける。

「ったく、余計な手間を…。ドゥーイ、一旦海軍の駐屯所に寄ろう。こんなトコに転がしてても迷惑になるだけだし…。」
「ガウ。」
溜息を吐いたターニャがドゥーイを促し、ユードの襟を掴んで駐屯所へと引き摺り始めた。
―６０番ＧＲ、海軍駐屯所―
ザワッ…！
ターニャがユードを引き摺り、駐屯所へと姿を現した瞬間、そこに集っていた賞金稼ぎたちが一瞬ざわつく。
「よう、ターニャ。前半の海にいるなんて珍しいな。」
「リブロ大佐、久しぶり。」
ターニャに気付くなりすぐに歩み寄ってきたのは、この駐屯所の最高責任者―アリオスト・リブロ大佐である。
「よう、ドゥーイもいたのか。お前ら、いつも一緒だな。」
「ツガウ……。」
ターニャの足元に佇んでいたドゥーイに気付いたリブロは、荒っぽくドゥーイの頭を撫で回した。…ドゥーイは若干迷惑そうだったが。

「ガープ中将は元気か？」
「相変わらずかな。」
　３０代後半と将校の中では割と若い方であるリブロ大佐は、新兵時代は元々、祖父―ガープ中将の部隊にいた為、ターニャの事も良く知っている。２ｍを超す長身で、がっしりとした体付きに厳つい顔のリブロ大佐だが、気は良い男であり、ターニャの事も昔から可愛がってくれていた。
「ところで、コイツを引き渡したいんだけど…。」
「死んで…、はいないな。見た顔だが、手配済みか？」
　ターニャが引き摺ってきたユードを見たリブロが素性を尋ねる。
「最近はどうだか知らないけど、２年前に１度消息不明になった海賊、〝硝煙のユード〟。…２年前にあたしが取り逃がした海賊だよ。」
「！ああ、覚えてる…。生きてたのか。」
「無人島に流れ着いて、あたしに復讐する事だけを考えて生きてたらしいよ。」
「そのまま足を洗って身を隠せば良かったものを……。」
　何でわざわざ敵わない相手にちょっかい出すんだ、とでも言いた気なリブロが呟く。
「それに関しては同感。」
「グルル。」

ターニャのみならず、ドゥーイでさえ同意するように唸りを上げた。
「まぁ、分かった。そいつはこっちで引き取ろう。手配書も撤回されちゃいないから、後で懸賞金も引き渡す。ここに受け取りに来るか？それとも…。」
「あたしの口座に繰り込んでおいて。」
「だろうな。分かった、手続きはやっておく。」
ユードを部下に引き渡し、懸賞金の受け取りについても確認したリブロがちゃっちゃと書類を準備する。
引き渡しの書類にターニャがサインし、手続きは完全に完了となった。
「そう言えば、最近〝新世界〟から逆走してきた海賊がいない？」
ふと思い立ち、出入り口まで見送ってくれたリブロに尋ねる。もし目撃情報があれば、一先ずこの駐屯所の責任者であるリブロに話が通る筈だ。
「〝新世界〟から？…いや、今のところそんな話は聞いてないが…。」
「そう……。」
ターニャが落胆の溜息を吐いた時、その知らせは届いた。
「リブロ大佐！見た事の無い旗印の船が、急に海中から現れました!!」
「！海中からだと？」
「はい！それが、コーティングに失敗した訳でも無いようで、意図的に浮上したとしか

…。」
「場所は？」
「っは？」
　急に会話に割り込んできたターニャに、海兵が一瞬呆気に取られる。リブロはターニャのその反応で何かを悟ったらしく、部下を促した。
「良いから。場所は？」
「は…、はっ!!!場所は５４番ＧＲ（グローブ）付近!!!シャボンディ諸島を離れ沖に向かっているようです!!旗印は髑髏が３つ並んでいます!!!!」
「！」
　髑髏が３つ並んだ旗印、その言葉にターニャの遠い記憶が刺激される。
　〝黒ひげ海賊団〟のものに間違い無かった。
「ドゥーイ！行くよ!!」
「ガウッ!!!」
　ターニャの言葉に、心得たようにドゥーイがその身を１度ブルリと震わせる。
　メキッ……！メキメキッ……!!!」
　そして、その体が徐々にその体積を増し、大きく膨れ上がった。
「ガォオオオオッ!!!!!」

元の猫程の大きさかおよそ7～8倍、普通の虎のおよそ2倍近くまで巨大化したドゥーイが雄叫びを上げる。

ドゥーイは〝超人系（パラミシア）〟ラジラジの実を食べた、〝大きさ自在〟虎（とら）。小さくなる事は出来ないが、自身の１００倍までの大きさなら自在に巨大化する事が出来る。

その背中にターニャがひらりと飛び乗った事を確認し、ドゥーイは猛然（もうぜん）と走り出した。目指すは５４番Ｇ（グローブ）Ｒ。

人では到底出す事の出来ない、４つ足の獣ならではのスピード。みるみるうちに周囲の景色は流れ、５４番Ｇ（グローブ）Ｒに辿り着く。

ザリッ……！

「っ！あれか……!!!」

到着まで、時間にしておよそ5分弱。驚異的な速さだったが、その間に目的の船は徐々に沖へと進んでいた。しかし、風は向かい風であり、思ったようなスピードは出ていなかった為、まだ手の打ちようはあった。

「っ逃がすか…！」

ターニャ自身の船は２０番Ｇ（グローブ）Ｒ付近に隠してあり、今から取りに戻っている時間は無い。咄嗟にターニャが飾りベルトに仕込んでいた長針を取り出し、〝黒ひげ〟の船へと投げ付ける。

ヒュンッ……！

カツ……！

手裏剣術も大きく括れば剣術の１つ。狙いは違わず、その筏のような丸太船へと突き刺さった。

「良しっ……！」

「グルル…？」

不思議そうにターニャを見詰めるドゥーイを優しく撫でながら、ターニャが笑みを作る。

「大丈夫だよ、ドゥーイ。これで逃がさない…。」

物騒な笑みを浮かべながら、ターニャがパンツのポケットを探る。

取り出したのは、２ｃｍ四方の小さな白い紙。〝Ｔａｎｙａ〟と中心にサインされたそれは、ターニャ自身のビブルカードだった。

先程打ち込んだ長針には、矢羽のように細工したターニャのビブルカードの一部が付けられている。ビブルカードは、欠片同士が引き合う性質を持っている。その特徴を使って相手の居場所を探索する事が出来るのだ。

以前祖父から教えられた、一部の海軍将校も使用している、海賊を追跡する為の手段である。

1度仕込めば、相手が仕掛けに気付くまでもう見失う事は無い。
くつり、と狂暴な笑みを浮かべたままターニャが囁(ささや)く。
「行こう、ドゥーイ。〝狩り〟の始まりだ……！」